あつめ草

和書門
類 一七六八五 號
一七八 函
五 架
五三 冊

内閣文庫
和書 類
一七六八五 號 49
五三 冊
二〇二 函
二 架

内閣文庫
番號	和 17685	
冊數	53 (49)	
函號	202	350

綴じ部（喉部分）の文字等が開きが不鮮明な場所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

東屋

私花鳥ニハ十二歳之秋

廿五歳権大納言右大将

中将君冊宮姫君事

私宮姫君ハ手習君也中将ハ手習君ノ母常陸介妻也

中将君欲嫁宮姫君於左近少将事

左近少将称非常陸介之女嫌之事

中人以此事告常陸介常陸領状事

詞云[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible seal]
日本政府圖書
淺草文庫
[illegible]學講談所

もしくすかしけりに物あかき人々もそ
いつる事
左近少将嫁家事
常陸女十五六
中将居所文於二条院中天事
所々又姫君許へ写事
姫君移居二条院西対庇之北給事
中将君於二条院伺見宮御有様事
常陸介聟左近少将参二条院事
兵部ノ宮参中宮給事
中将君与二条院給中将君伺見事
大将与中将君物語事
謂彼形代在世處之由事

大将得形代事
大将異香引宗王品事
中君傳大将心趣於中将君給事
常陸守妻匿事立二条院廊方兵部ノ宮見咎給
事
中姫於陽給事
兵部ノ宮見所姫君相對面事
右近君少将君悪憂事
中宮御胸病之由人告申事
兵部ノ宮参中宮給事
中君姫君物語給事
乳母行常陸殿又帰守家事
常陸殿訴萩寄送 聟少将事

淺草文庫

宮姫在三条家詠給事
母上送文事
秋末大将殿於宇治見新造御坐給事
逢弁尼同宮姫君御事給事
大将草苍帰京事見女二宮事
大将遣車於宇治迎弁尼事
弁尼行三条事
九月十三日大将至三条家逢弁尼事
引入車事　逢姫君事
大将殿伴姫君行宇治事
尼君侍従君同車事
大将殿遣御文於女二宮告乌佛餝二三月逗留事

東屋
河　花　以下弁詞為巻名　秘
河　さしとむる葎やしけき東やのあまり
ほとふる雨そゝきかな
東屋　アヅマヤ　四阿　アツマヤ　両下　マヤトヨメリ
秘　四阿　阿句舎阿於阿切考工記阿重屋（或下）今
四柱重屋構営
新案　アツマヤハ重屋トアリ　アツマリタル屋ノ心歟
以上秘　箋同
秘　あつまやとは角木（スミキ）ヘ斗棋木ノ下ヨリ
葺下シタルヲアヅマヤトイフ　常のやうにはなしぬ
処ナキ物也又ハ吾妻屋
花　薫廿六ノ年より
細　薫廿六歳の八月より九月廿日ころまての事　弁

維摩…東…座…[illegible]

私詞 如 お

筑波山に分入ぬる御作しさらにくちすへからす

筑波根 つくはねとよむ 波ノ字 濁テヨム

河 つくはやまにかけはあらはるといふ心にして大

りうきさくらさうしり

筑波山は常陸国の有名の[illegible]

常陸茶内の御心すみて[illegible]大[illegible]の

ふくし御上のまこの[illegible]のましさとし

知常陸国のにあやかくいて

手[illegible]のつくさ常陸[illegible]の[illegible]

つきくる山をいて[illegible]

[illegible]有[illegible]ハ[illegible]

[illegible]

くきしつく[illegible]

上﨟しき程かおかし

箋 よろしき方の侍女も源氏のをりにて

せつなり葉女よくかしこきて

くらゐのためにまうおほしけれは思ひいれていとし

人こそしらめ

私 葉の事の侍ものゝ故に無きことなき方

ハ宮とのおほせに分とせの事もしらすして今人すゝ

すゝめ文給のめのとにきこえおはしまして給つ

くらゐ方の人にあひ給ふかくして御心

めのとにあつ作しらすかへし 箋

箋 弁の尼よりしをうきこと母へ葉の

のちましきことあらはしけるなく

まの母の侍へ事もあ思ひなるハ

河裏書云
常陸上野不
論王外不任
諸王八宮達
ノ内事也

私 母のもとに

つれなかりしに人々かりしぬ

箋 ともとよりいひくつ

みのかみもとめけるにいとかりしはかなめ給ひ

河 守はしかれいかゝ思分みあれ

河 守の大すくれ親よ置也親王任時不知吏務

仍以介為守乃令勤吏務云々

此故介のなれはいとかいけなんと陸奥国守凡

人任時止大守任下介御なめり

私 そもそも司のよろ人もうち御かへか書

源はかか妻 以上私 腰也 旅人も近将監 章大将妻 以上

中将君之腰也 私 中将君ハ則侍母君ノ母八宮ニ仕ヘ時之名也

秘 常陸守ハ親王也 とのもとに給ふ

人丸霊ハかくてこそかしこけれハこゝにゆかり守
しかれとも仰にしたかふへし
そのしるしにかなふ
秘 歌として 蔵
二つの事有し歌くてこゝにかく
此うたを口伝也
秘 女歌をしたく女ナキくれハ口伝也
つたへ有へし
すへての人の歌をまもる事也
此哥しかるへしとも口伝にて
とくとく思ひつゝ心にふかく心え
此うたの舟ハ 然人ヲしつゝてたえし
いへとさためてありかたしけり

いつゝ舟の母のたねはしめとし
則ちすへてをとしてしたかひ
修舟は母子是人母のかくて
こゝとてかなかゝり
此うたのこゝかつかつかつり
母のふかくかく心
こゝ百千しめのつたえ
哥を修分のかなもにまことつたへかゝ
いかに
たゆる思のつくし
此 同事し
とにかくの二三人
歌さるのおもひて

さるくりへともく
いかてわかいのちをしなん
扨母のまへにまいりて
わか継母のたちいふ母はまことし 母に忠つくす
ことつかひまいらせ 父も継母をも のうちに
かたちも継母をつかへてひとへに
扨わか継母を刃に事ゆへ
よくいつくしみ 寺のうちに居て 継母をかこい
くるしみの母のかたにも成ぬへし
事なきにいたりて をもつくし
いつくしみ母のたいをうやまひ 継母忠つくす
かならすてん 并の銅をいたしほしきよし
まうしかおもひたしきれいに そうしくつかまつり

かひらくり
しるいさきなりしかもくらしけり
爰に継母のかたをいたはるに そこのことに継母ゝこと
ありしにもしのふたりにしきことにもあるに
子さる継事ありしを あとに母ゝの事し
ちゝのへうへかし あたゝし
爰に 継母の人をくはれて
事にかたしみかりて くたりしのに
爰 さけのすけなしいてかたはらて
河 好事者募以錦帛 注孝
わくしうちいつるとゝつの
そしても 真備人をまいりて いかにも
めくらいくにうしてこれまでめく 以

玄松　いつはりに中れさまてさく人のまねて云
うつしても松中さしひき
まつりのあつさはかりそ
松　豪家すしめとちともわすれくすく
うれさしも慕ふて全人とく
河　豪家
うしわすく両分有ひつかりかえりて
田舎人のあはゆとまらぬ
いゆくすゝめあまえもし有
玄　今し
子　芸済事慕ひつゝし
玄　あつかもうゑりうさとあやて
うちわんいしくしひきける

玄　ある国の人くてこ武蔵あたりの東の雨の色
すゝめて
すみくしゝさいくてもいさくかいとくさんとひか
さしつく
玄　あてつれうあさりをもいえゝ西東世へり
人あうとうし
うしとわてうこうあはせ中くらかゝうどんなし
河　腰折三合　ゆかりうし合　庚申
松　中倍合三合で
庚申詞しても庚申あり　子
玄　庚申すゝ事い申さんも絶於此集
すゝの詞あり有
これゆきうしのまえんさら

花　庚申経云
人腹中有三尸為人大
害常庚申夜上告
天帝記人品過絶人
生欲人生庚申之夜
不寐則不得上矣
許渾詩
年長無方推甲子
夜寒初共守庚申

宮ゑ今朝の御くしとひくらきんなまし
くらうへいうへんなる
姫　さるつるつるこえし無もくるしらなきて
いひすめしヽ
たまへ御ゑとくく〇大二三ころくの
身　え御すかし人のもヽ
大しうへこ之稚な見
ゐら中のり　さし有し
かし御夕れしいさんくなれく
きくしし見ヽつかめヽいくかしい元いのへなるや
蔵　けりあひくるの中おおしくしこてかくるく
うましし不みしし去して
無おし御へへりくくらのうまひし下へ中しく下

このゝ宮給ゑとれのおくうしいんひしうし
こゑくしあ京くかつくら事ゆへくてのおり
蔵　くらこ十〇のくミひうく
こゑくしうして人くしし　ゑ宮と行
二蔵　ひかしよ中のり
ひらくしいるいのくのくゑわかあるかヽいへて
綿かうし
家中とさせ事しせおあ申とかいしこされ
事しあるへくし
無りありらうつかへし
蔵　無ぐ人ぬしにこる〇へし無のとひしくし
ふきのりとひ日ねうし
姥　母へらし

いつれかいつくりもよひすくとしてもよういとなしつゝ世をそむきて
きゝしらうかおもかへにもよしう
うつくしく
さゆくしくハうくきさおとうくうれしく
しきさうおとさへうれしくいかにもへにこそあらし
そうつし
まくきこらへんのいとおもしろく ふくへあるく
河 蒔絵 螺鈿
こゝろかくりけりとうりありして
孟 うくさきいかにかいて
とうしうおとこらんしくしく
孟 月しかとかすといき 世の事をしらく
つしやくらもしへしかけ

辛き 男女の人よくもちもちて
かゐるつよさしいかれか
河 くはしきてらへうて
ならひのめしきくいきゝとてみへうてらる
弄 内赤坊 大よの女へうてみ 百年
赤人 藤姫 もゝのこゝろ
於 今の大よの御しるゝ
并 との世ありとまくこ小すへれとそにの女
となりくらひすくまし
河 内赤坊赤 大中納言 中将と申さん
補して
てひつひらくしいく しかてらめかつらく
孟 き海人への男女のひてまえをかく

くちをしくかなしくてあまた

河　一本楽門家坊説ゝト云　絃をえと　曲流

ありける曲の中にみちのかうをも

十三学の琵琶の名房家坊の十一部　琵琶引

門家坊は琵琶の師　松浦の右京亮

松　さくみてゆき曲の中にて

そらしきくちなつかしきあゆくものかな

州　是

松　師とも

家　師匠　同法の事也

さぬるり梵もてしる

松　ちかし

私　おもくしさるものにて有けるしたまふ

とぞて

ともあれてすでしきりてかへらしく

家　うるさ事のそうをすゝみしかまへ

あらはとも牧ししかりしけし

河　吉子　妃日本　栩子　河子　家子　如本

松　わらはかゝるさ事とてわかりつかう

あまてすらしうらしあらし　家

ふかゝ中ちてらしく打ちつゝく

なまあれ中の八月のわけ給へしとし

前り有

わんたりくるもしいとしし

松　くゝて○の母のあゝく　家

人のあのなくさうゆをもひく

客　北しやうの人もいか成御ありつるとく
よろづ多く思ひくらす事のみなり
いまさら何に御侍る思ひつゞきくるらん
あはれかなしく思ひはいと初く
かくてつれなきよにすむもくるしく
主　いかゞおぼして　客
于　兵衛が中納言さがしきものゝ子参りよはかく
いふて
御みむもいでいかへく御まいらく
いまさら何かへ御いそぐ事
いかなる事に御入てすこし事も中く
客　御みよりくて下は事なれば　つまくが
しやうのはつひてくるり　御はや事かへん

もと北のこふなけ　かくつかいて
いまさらくわ御さ侍るて
主　むかしとるしもと
思ひ人なきつれて　とこへいひつかれ
く
主　ありつきそふとく　大ちやう殿を
秋ふけ行のあはれ　やまてゝさいもんす
くかりくて　それ　とき
ぶつくとけて事かうれん
いまさら何とかしく　ゆかりまいらし
ゆかしたるあまさ　うらさ申し
主　此か中の人とろかいてい　客
まし思ひたる御子　見てもらはば

金 荒涼の女しかはりく 都まて すゑく

ちくかんて

向 云しく 泥

すきはしかりの かわりや さく

ちしうつしへのいとかり わつとも去らむ

秋 かりかねの詞

荻 うつつの事かかりつくしねこ

しも はかしてらく うしくま事お

らく 菜内よし ちしくうしくま 事お

様のかしきって

いしとしくかりく

松 なりうらのらへ 金

ふらしくて さらし一夜く寸

中くらの詞く

中りにしけく山ともからへて

山としみ女中りらしりはつしはくこまて

こく荒涼の女しらくもりすか津

くりしをくくすつ若く 女も中くちりを

うしれく

つみありてそつてして

たつらしすゐ有もれしとおしいさと

らしく きな しくそおしさ徒うへ

金 繕やれのかりしちくつあしらしと

ふくらんもすつとて

もくら中くらのすゝともしくら袖とひ給

しくさかはりし

こひしおもひわたりつるかひありて
御かほをおもひあかすなみたは見えし
こうなかさきうし
御かほかくは見えしうら梅を
さてのひとつしきつまん
物文のなこれにけるかへ事おこれは寸
しれう
松おしおもひたえうかりくと思ふ
わかれかくおもふにおこたりしおもひ
さてのありかたく梅をかはりきておもふ
こともおもひすかくかとかおもふ
こかにけ文見しこうさかにかくゆ
おもひしかはさたまかくさせのとけ

まくあまもおしとかもおもひのわかれた
へまかくおもりいねをおしおもはなれと
いつくさくかおもひもてまし文にあらの御よ
かく事て御文しもてへとの事をも天
くおもくいしへくくもさくらくもてたえて
こつてらときし文あもしつきかはりのかけ
えんてうつかははあつもやもしもかけ
かれたしらくえいえもてし
御門てくにうつかね言あまにつる寸
三つしもうつくとおもひ
御おほさきかてのおくのしみとくにくる
まさうく
あくつお後のしつぬへし系帝すれし 寄

記　卅二人の女ともまつるもなれし　かれ
ちさ浅みのりのしらんとしよな君へ
ろしめくし
ひるのつい□さてもてさんりんもく
孫　捧く　追従ツイシヨウ　余人く
翁　中ならの袖く
いふつてうあさくれさ有　見ひすてし
繁　舟多く有しおしもしてにつく　捧て
さくみおもんれくし見たへし
まことりち□つあまらに住さへ
ままワすおし□つとし
孫　中ならの袖し
秋　今みてて　二言ま御てアてしん

中りびくる御ミそん
おもく有中し　さら浅みの門し
翁　幸須のもら□りもくらて　御絵て童
しのあまりびくらし
いさくすのもらさらひえおもへてれさて
孫　かやゆの詞
記　うさうあく　女つよう　さり　とさい
ふしいさとつるこひつまて　だくるめ
すおゆんく　さら浅のむつらうれ
みい人のねしのくらし　ゆきし
ゆ　王主て　給うさく　しかて　しくつの
つちゆく　大して　みせ　すかの　れし　のあ人
まくいすめもらし　こし

秋 すまのうらにしもかれゆくらんと
りくしたよりの 御守
これあてまえ人すむしせ許りし
ひとしあらんとしてしのひしもと
ふくらかくのこ中心二のあき
む こそかしひき 侍れとも花のあけき有
しれとし
かくしかく世中おもてなし事に
つまき世の京にありてしくなるはこそ
さりゆるかせきにくなかるしきりしてもへ
ゆへ
まのこしたおもひて前のおもへとひとちしに
わさめくさりしおもてかくへるかなし

むかしいまもの二つわかつかりける
きしらり
む 西の右をしきこゆるのそのつし様へ
すゑくのいりしし西のあまりものかなし
いしのあまの京ものとし
秋 ものかしむのあまり有てまのしくへと
りしへ事しかくらし
冬 世にくしくしの様のかの侍に
かくりかたまくらくそこ
ものかむのまり有し
秋 もすたまのほしそうつしてのこ
世のかしのうまおもしいまの作へ
まへつかめ

道寿 姉来りくるしきことおもふ有しに姉の御かたの
菊 姉人ハ中々の事姉の姉の子をやとへ候
のそみなりかやうにおもひまゐらする事
よろしひ御事なりかたく候
秋 さりなから中々の姉にてもよろしく存候
姉おもしろう思ひましく候まゝちかひ候
有之のゝよ
道寿 姉ハ思ひもよらぬ事にて候
妹の姉もいふく
ありもうしまいらせ候よし
菊 姉にもましてよろしく候
まいらせ候つゐのおもてむきまいり
妹のことくに御入

姉にもくハしくいひ入てすみやかにもてなし候
姉妹の方より内々にて申しておく
のりよろしくおもひて
ちよの事すこしもかまハさるやう
あとかたもなきやうのつかいなさるやう
松 姉の詞
こゝろひとつにはからひ候べし
松 庭の事申し候
姉の心ひそかにまかせ候
ちよのかたの事
菊 姉のかたへ
秋 よろしひ事ハさもへ〳〵ちかひなかれ
てもとよりもかたき事ハいつれかねかはしき

うつくしくさきわたしかすう
かしこき人なかりきそれはきよさいく
あかぬ
これ月しのふるよのかへした
秋 擣衣
河 こゝろのうちて山寺のくく
詠 こゝろみ候
かへてありけり百しんかのそ紙
ゆるしかいたし
こゝろの風吹流をかにしておほろ言流
二条家にはこつのこゝろへ
てにをはとかくしあるへし
如棒手 掌上珠とも云

こゝろのうちのわひしさあかつきのかねりて
とかくこゝろはまつてまゐらせさよし
しらさ人事
秋 ゆくかなしの夕かへくつとかの秋の
ひかえてなしかりいつゝきのこゝろ
へもちのうちかしらいひてあくよ
うちくれ秋の袖の御ゆささかつかた
ゆくしていてもくかなかへくかのかたゝれん
たつるへてかりつくしつゝつくしけ
そゝりそりてかくて
冬 中こゝのへのこゝろ月にかさに
しつゝかうちかなくて
秋 いへとかなるしいて

ミとのかさしのおそり
かのおとこ人の命ありく
ミ ちのつもりてそふしゆるにきよしにけりしかは十分の
子ともしとしのつとめしからむかしからしかし
なかつてつゐりてよ意見くるしまのいさして
作しく云て
佐 せけらし從探のとしありこれもとかるゝほる
れし
まつおさきさてあかくかてす行けみ
中将ありけるかたへ前にもちて申京極
りてえいしく行中とらしてとうし
さしつ行る仰せつかた
秋 ?のつく仰

寫 かゝりつるきのまきをこそゆかし
ならはせけれとおまつへいたし
しとつるかすし
いとものつかへあれは
首のわたりて多きはつりしゝるのかすて
さるさこなれはいつれも
このゆへにをんな(?)人をとしこそ書も
子ゝしてあるうつらへしゝるにこそ
つゝのしかくしとはしゝきをへしとは
せ人のくりいつくりまし後ゝのもしけれ
いゝにも中のあるをてにけり
なかしのこら侍りし
かゝりのつけてはらしゝ申つくは

さしもくるしきみちをしのひ〳〵 人々
ミつからかはりとしくきくもねとし
さかしさいひかけりよろこひ倉てかけ
姉妹のいてまかり、きゝ候へ母にさへつくし
いとらうしうしともへつゝつゆくし
むかしのくもにしかりとはめかし
姉 とかりまいらせ給ひとし有しとうし
うらみんいのちもたえん
姉 乳母とつゝけこゝろ年猿の中々
こゝにおりまのせしつゝくとし
姉 乱高へい明 母ちゃかしこかなくしくゝめ
かくしこつくらん
いよいよみまくくまるしくしけり

母の涙から注不審
秋こそおもふ 幼かのりくらうこゝろ中
夕の家かく 幸候へもしくらくを
姉 ものしけ人々こゝろ中の家れまかれめ
鎌 流しい口〳〵いてまへく
さかしかりありしくしけくきく
涙興こゝ絵かたの仕ありし
こゝろのおもいまへりてゆ
姉 母のかいつくしく 出
くうまかりし
姉 妹のくゝ
かくれもとせしもくるつゝ事もし侍す
姉 妹の御へ

きしやすへからさるし
松 人なみいつわりて
もんしやなんとおもふ
茶 さい言ふしも見様女かなし
は 表言 注生事
かくらくてんのおもむきにわたるも あつる
かしりをみしてかわらぬそてにくるこ
茶のねしかりけんかをおしく さゆるき
注生する事くるてうしらうくもきをへいの
らしにあてくちの言ゆすくすかれ ゆき
よしつる事 謹てうわかつくし 茶子
かれそいゆんとれく
松 こいらかねか 誉くいつ

ワキ 言てらうとし
子 一はワキ言ゆてらぬ 詞かやうとうそ我
言りしかく
松 よい言てうかわりし 風流のねとし
ておしてをわし一してかはりつ寸
む わすしてわ中わりいゆ 詞
松 言のわかちゆや 子
茶 風流のわく
つむりしい一両かわし
茶 新りし
ともの中くすく中すかしく
は てうしくかつしいゆくし みき皆見
いえさきりもゆくかつかくいゆうつらる

ちの紀り　はしつのめてかなのしるしをかく
かへ来つるかつまてしられ
む　狐　阨も露く　くれうまのまつり　なすると
すへし
男わ　桜花をしつらるる　いか　世にうのゆるく
ゆくとても　かゝの埋もらし
女　人のとみえて柳はおくれしとて　あはれけて
たゝ　世をかくのひ　なくなきつゝ紗す世に
すかしとこそ　風とり光ても
翁　光れして　のうちのもと　いへまて　悪し
と河なるを抄く
衣　女　翁は露し
抄かのうへにたのつゝ　いとそかに　何もうち

翁　路をさうの華花かなら　くゆかく
書とも
ぬにかく　直人　法不尽く
らしかへ日経り
翁　羽なの果すつゝられ
二たゝしいかこゑ人　とゝしれ
河　介　庚日記　頭　翁人ゆも
平世なの翁人鉢くし
女　世なしの翁人はかし　初　定しいてさし
かしつ急しれ　虚　ちれしらしぬとのへの
様なすかくもういて起たく　いつの
おもしゆすへき翁りつかすもてし　翁
衣　田あり吹くゝせしてへてゝいしく翁へ衣

りけるくみてしもとひとらゆひしけりくるを
ゆるしてくいつるめてし
くるのくるゆけるるとことてくるつつて
河こそこ一戸御てこうさゆてしとし給え
もしち歩き花つとら給え
ころり乃筆よすもひとらう詞トゆ
花　世紀か下抄思ひの作りてし抑こうし
一　世詞と上乃す万り作の文くし物様の
女乃しりてて花給りてうし
一　わもん乃てい乃しゆて乃をし
こうしわらし
勅定乃しや世乃様乃く云也ろくし
花て後乃す事し

あらく乃つ乃しつく花つきていう物はと
あそこく行きとうこきしるこ一戸物こうこうり
なくらくゆうりこうそこさくすしこ
花の乃みのにそ（とて）つきてあし
一　世ゆ中しもいて
こうもくしわ中とき事物こうのすし
抄　様の個合中めてし
其詩人の乃さめりもらしてこ事物いゆし
行く
いかしくうらく乃てく
河　雑夷　わ中しくら　抄事紙り
抄　わ中く行く
ひ乃ろの代らし行くの乃くりつくしんもしん

一 此かくの詞し まへの詞のことくにいつて 此詞は
心くるしき
かくおもひわひしいかにとせんと
此みえこしわれしらむ
さしゐ此つるしてはかまさりて
ころ此つるしてりり門かまへり
心さしおもふ此つかへしてしかも
おもふ多く侍るこれらにこゝろかりし
ことにつゝ
一 此後の事わらいふすゝむへくさる事
こらなる心し給ふて世挿ミしかの中ふりて
思ふてあるへし 思ふて中すくし
こゝに侍らむ思ふてさすなりこゝ

此のかたは中のさししめさとこゝに
大臣のかはかのはこしめして
無上てらるゝ中のく中すかりてこゝろの
所かかくしてしけのてよし給ひ
新てまてこえ侍るまつさ猿ヘ中にら
こゝしおもへし
まつしかへこゝろさこそうかへのかて
帝何の帝まちゝろいて 新宮 もれ迄こと
思ふて
おりかしてかやうにかねしこくてこひて有
つくこまりしこそ思ひもし
此うち色おくしこしおもすねつゝるのいへ
やしてめつうち離解し

かゝるほどにしもとかの御ゆるしもなくさふらはし
きこしめしおきていはゞそこにまかせなん
となりし
秘子のはじめいかにかくのことし上の土
かくしておはしけるにさしこらうかゝるに
さて大臣かはしく贖労申すべき事なりて
かくてこれいかにもいふくかゝるにたれか
ことにたちつばかのうらかゝり
ちかゝる事ともありてうしいふべく
とかくのなかにはか絹うかりし
いとほしくおぼしけるにぞ
又　妹ありし
いかにもおもひ事なかりしとぞ

兄しゝつかのつくかくてこそ中にしのいまうとも
しくかなのえてうしそのつくかへもえとく
うとしかぬてし
あはれにもいひつゝ
しき弟大母かくのごとしてつかなたりつゝ
つまかりかなしきてうつりぬ
あかくてはうくしくき中より
妹のいふやうかゝるにいなし
ちかうしにをしてまうす
ゆかしかりけり
ともかくもならひにしかりけれとそ
河　贖労　右記権大納言去年献贖労中宮云々
ちかくして河はた有をくしてうくまうし

女　贖子請てくれ

益　そんなら待請のうへで又した後御見

云　それしや引罰が御上へ今ぢやわいなもし贖

銅　しかし云童宝物しぢやによつて店子のなか

吉　ぢやわいな

私　此女郎はそこへ御店へ御かへしなされ

崔列　しかし浅ましいことぢやによつて宿子の

しかし人それはそこへ洞見していかいな

そうしてしまひ夫婦

さしのおかあさんにそのけやうにしてもらふ

妹　さてそれいふとも

私　此母に見せ

私　さてもよう一しごとしてきましたのかえさま

つり子のしゆ中もいふてきたか

おかつかさ中しや子のいのちをいふてもおいらんといふてやつてさ

りつり

子　宮殿のかへしとのおかさんのことをかんしてみん

つりて見てやれ

妹　妹子の納めし御女のかたへこふし

私　御かくしいたしましたよふで御女中　益

今おおもんにしかしかたのむ母のその指図で

大切にすれば一代いひとかなし

まし中のことはもういふてもいふてかんにんしてゆかれ

子　かしいの中のこしらへて

益　ちいさいさうしてからそうでいえばつれてまつ

うれしさ母のいふことをよくよくして妹

かくいひ給へ
りつゝさりけるにいとゝおかしけれは
はかなくてゆくへ世〻にりけるの詞り
さてもくいつましく思ふまへ
をかつくし御なく母のこひし
つまひしし弟そてつゝしみ給ふ
うとひ合てまれ
きワきてつゝしる思ひわれん
おかしきりとかく母のうるに一てんさ
つゝとむすましまひさましゐて
くりすとしそへらさて
おかしきうてまてつらん遠けれはけり
利くしかうなさへうま給

日ゆくりとりこても
むもしてへのまかすしもしいすさ
すくハかいもつさまてうてるかん府
くそてらけ
ねうさ母かし平くてしおわれくちか
すくりいつくおもかくへつさ
まてをくりそてらこ人はれ
小うてそんをひいしきらく
母小かて世かおくちすうおしとてめく
いこころの月てしおする事し
さくおて平かしわ分
ねとくつのし
かやまかくねかめの人つゝかへて

さこそ母のこゝろのうちかなしかるらん二人の御かた
母のなけきて
かなしくきこえさせし
姫[illegible]のことなりし
おとゝおほしうちの大臣殿のそうつ
[illegible]くし[illegible]りし
のちなりしきこえてとしのころすくしおほせ付
ともに宣旨のきさきとならせ給ふ事[illegible]
ゆかしき事ともおもしろく
かくのことしきこえしみちのこゑのつゝ[illegible]
[illegible]内しやうのこふりにおほしめして
さらにみやこにのこりしに一つ[illegible]
又[illegible]しくかしこ中くかしこまりにて

つゝ
中[illegible]ことにきこしめされ[illegible]の[illegible]
ともにへし[illegible]まいらせし事[illegible]
としたけてしは[illegible]のさるへく[illegible]
いまはおほせのさてとは[illegible]の人々
[illegible]のかくれなき[illegible]
[illegible]のさる[illegible]
中[illegible]とくいのきさきの[illegible]
[illegible]のまへに[illegible]とひたまへるそのうち
さてのこころ[illegible]いてさせ給ひて[illegible]
[illegible]
[illegible]みこの[illegible]
[illegible]ことの[illegible]のしろしめし[illegible]

のりてもいへ世をはなれていつのありし
みかとのみこ
河 そこにみこ
あとにかくてもんにかくしくんしてしうかんかの 箋
河 吾子
新猿楽記云 十一君 元 裝人 十二君 假相人 尊
ねあはそれとしふらむさしもいて 箋
わくしのむかしのことくする
一ぬのうきこなんのしすか
十手紙の物もかしてかなかしけり
こいひく
ねかのくさんのしすへいまい十とわたし
きてしいて

箋 みこのしすめくへ のみのなしにかり
いかくもおもて
もちてる治ちいるね兄くてあらし
河 周或妻
こ むまゐきる用し ちかのくるきよう
まかしてらて
いまてしてまちにつけしてとへふなと
そ
ところりけの詞
あしてとひもかてらいちもとし
箋 かみおもにけいかへ
かのく万人このいひうをのちのかみて
箋 かかこのあいかなかへしくして詞つかなふ

さしかゝる秋女へとゝまりつゝも
あつまりし人の思ひ入ところもも
いつまでと言葉てへつかひ出満しく
とゝろし
松　奥もゆくも　蛍
かよあふれく
世のよきつゝの茂草の事てもしかく
きゝそれし
こいしき思ひ絶かり
蛍　ありしくなつかし
とかくうつくしき言かり
松　まさつゝのはうし
くりいとさしき内りし

蛍　うきつゝつゝらの事
とつれ言れはしたく
松　かれしてく絶り　千
このもの中りし
松　まさつゝの身　千蛍
かぬれしとゝてあれつゝ
かい世のなかいへて
おこれりあはの人絶
世をまきつゝの樣の事し
くさいりりそしきさし
世かし世のとゝてしきる絵みく絵
樣のもりし樣てくきりしとほつゝし
ちはなことしさくしも

おもくつる世のつねのおもくさゆへ御心
子 あしやの紗へまいらせまいらせてくるしき
しもと
松 あしく紗へまいりし人をあはれみと秘
さらへなしとれ
太 まへかしかわかれへおもくしやにて
いつく言かのゆへもしえへもちて
松 かなりかくかへにいかにしへおもく
さく待ちかへあかすまかへいて
かきていしてなくてもち
くゝつゝゆかへりへ
ゆくいしきくいつへ事をしもちん
子 しゆもいしきへかへりかえりいてく事

もとみゆうしてしいしてあかんとしな
おもんしらくいかにかたのかへてなき
子 かゝかへかなしこしへ
松 かゝかへくへいてへ
秘 かゆへの秘しくさうてゆめおもひてちす
もてゝかもしのたまへかもちくえしえ
あしゝし
太 かうそくをしゝくのそうのゆめ
あれはたゆへのかゆのゆへしゆえ
あゆかゆうやゆへのしかゆかゆ
松 世の絹 妻
太 かくしのあくしたゝゝ式まへのゝ
松 久かゆし

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

国史云正三位源朝臣潔姫者嵯峨太上天皇之女
也母當麻氏天皇選聟于得其人得太政大臣正一
位藤原臣志仁ム事也 弱冠之時天皇悦其風操超
倫殊勅嫁請和太后其長女也潔姫性能琵琶頗可
賞翫

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

くもゐにかよふおもてさしなきなまし
うちきくつかねらうし思ひもらし給へと
このみゆりの中ところあまたいひけむ
箋 今とこつもかりおもかつゝ女くしけの
ちかへわしもすつしもつくらさかるに
おもひおほしまかる
箋 もしろく 兄 こうしのつかはしとも
かしのかりきつくいひつゝもらし
千 三條殿公きけれともとゝへつもりて二さて
しゆくしつて
かやとさき帰りさつとへなり
桜 あくちつゝもよつゝとゝも
あらつさめしつゝ下思ことしに御心とて

まうけて
箋 母北の方のつかさをたすけしいとおほく
今迄にもおもかへてもてなしにつけ ひさかし
らひて かしこまりたるさまにおほしつゝ
はしたなきまてさらに
厨子二階 箋 とてら下にをくゆるさくやうてる
書物などをおきたるなり書物をのする
へとなる也
ねうちゝうちもてなすゝめて
桜 無我しけしとのゝあまて
箋 みるこゝろゆるす事なしと云々
八三桜
河 未のさかん十五六のほとにて云えさ源の

女 かくしかりけれはかくれありとも すかくみゆる
みえしと つまもなと いとし
松 うしき おもひさし つまもなし 八上予
私 世一佗しくうき つまもなきつまもなし
白さうく おもひし わかひたつまなき 有女つまなき
ころもし付し 女 つまをいひて 身のゆくへこそ
うち白衣の つまし しきつまし こそへ つれなき
蓑 さなまへ 女そしてそ 松のかし 墨白ゆく
らうかわしも 你しく 我のあとつるつき
つましつ と好す 事
まとのことそ くうてまくらの
松 ちよの約
蓑 小松のつまもやちよのへし 松し

世のくつかれを八
小松のいとも八女としかゝりつまとへ御らう
つまくるしき母なきさ人にこそれ事終
そしく身を
つかしつかうすてつらひ
蓑 事まへいけし女のかはらし
ころうきつ何り
十つくつの下書へまし
こゝはもうらひかれのふし
つかつうちのまさ申り よしいつきてきかまへ人
とても見へし
松 人をこゝろしも
私 きまの妙か女のうきかりやう 小松の伊弁

つゝ思ひわつらひ人〱おもしろく詳にてんとて
とハつき事ともちの心すゝめかゝりけり
さハりの縁ハ切しもんとして方へて世をわたるの
人ハ子をもてならぬとなりていかうとしてうつる
くらゐしくひらもらちとくまうかうとんとらしい
しも世の中にて人のゑもとかくしてゆくいかし
世の中にうつりかはりゆくゝきもりの事に
おもしろし世の中のいとめつらし
翁 かれらの事也
秋 おもしろし中〱あり〱とてさく事
まこともうかしうきことにかゝりし
いとくもに
その夜もゝおもしろき次の

松 言わけて来りぬからう
秋 さても有難き事しとくにてかゝれ候はし
只今にてつかはし
世の中ともにてゆき
翁 しらさうらふ世の中へかりよし
わかれわかれたのもしゝり
松 中言し 翁 言てかへりのわかれ
翁 うきさかりおもかへりしさき事おもへよ
只今かく
その心ゆくゆくて
キミ御かたの中さまのかつの出の御し
かりあらへこそんして
松 まつてへし

ふるきのよはりかくれてあつま
母かなしみかはしてこゝろのうちもあはれにて
とし月かさねてもなれにしかとも
きのふしきまりいまさらへて
参 中宮のうちかはしてえびらをしく
二条
二条大さうらはのかもしくまゝく
御 中宮のみつし
参 八幡の御神経音なかりし事
とりのうしさ内よりく 菩以つまへし
参 二条の文八幡よりてをかんきし 二条よりとうし
中宮よりくし
秋 あつまりて讃ゝき 世わりあつまりて
しかりちうば以んて

とかしくのそ事わかくさまとりかゝして 二条あつまり
ちくゝはらんくし 大弐なりつる参りて
大備のいとしかし
御 こゝろは母ふくくつわりて
さらに母はしかしこ 仰しあ
御 右衛門の御へ
あさつ いしかへりけうすの なきまへて事し
八幡の経中ゝかへりし事ゝ言もし
いしつゝまわりか出て
石ふりのうち言語なかりつへし
いつはりつかしもまんしく
御 母なりつゝ 参
さころて母のあつくしかく

佐 うゝ二つのし
千 右ようしひのものくわしくね
とりきうくしかうくる事しもしられなり
釜かり申す御家のけいゆのかりはすなり
思一く伴信友の思申しけむもしれすなり
字しひくしかうらかいわつらひさんくもうく
於 来俗 見善相公竟見
思ひか云ふ京のちに物しくいひつらきわこ丹
うらへしに後
又もらの文字らかこうしてく二つりいつる
きもる一くくこともくわつるのあさ一ゝくこ
寛てしいしいひ御作りく
家かしわ申へのなり

まとうるのけてのわさつれひてさうくへし
釜かゝ申してかゝ拾さつつしていかゝるの丈
物つひのおゝをか可へと行かるへし
御かたの御ちる来もうてくいろとも
千々之とらるのいすゝ見えしく
こうすかくうりすらしもとすとつくらるとく
於 西のそれへしき申さしかさらるの世れすしく
字やわしゝ申へし
釜 西のつくつしてそうく寄のあかて下の
とゝ出か申へつつして
らくれつくれうらうしもひうり
お りのくつくはこうのさつ一
言のまし思つ一行そあれ

姫　あまりつらき御心
新　中将くるしからぬ方へこそ渡らせ給へ
みるもわびしく
姫君さへうち出給へはいとゞ人わろくおもはれ
つらきものにしも思ひて
弁　中将殿の御心はうきものとこそしろしめされつゝ
ましていひ出させ給はゞいかならんとも思ひつゞけ小将
思ひきこえさせ給ふとはいかなる事にか
うちなかせ給ひて　新枕をもさしおかせ給ひてこそ人の
あはれをもしらせ給ふ　思ひしかはなつかし中将殿は
ちかりしむつかしきつらさ　弁
こはいかなる御事にか
弁　中将殿は

ちゝはゝもろともに二三人
うらみつゝながめくらして
くちをしきことゝおもひつゝ
姫　身のみうきなりとぞおぼゆる
弁　二条院にての事し
こゝろうくおぼえて　かくはまいらせし
姫　ともかくも母少将かたへいって
まことにつらくこそ思ひまいらせ
弁　されはこそ中将かたへさらに
いひやらせ給はでもなし
姫　中さふらはで
わがみもこのあはれさとりてまつる
人

な　二条の御かた中宮母のゆかり中納言
きみさまも中宮も母かたはよしこゝろしく
かわかたの中よくいひし
弁　いつそやわかきさうしのかたの母のかたはらにて
ともしも
つきつきしくしいなさけ
松　こゝろへてもうらしくやさし
弁　わかまゝなるほどにおつくるもちらし
志のひてしらひきてしかるへし
このひとくしらし新都のしてまつこひと
こゝろにかけもいかにとて
松　かりにわかわか
弁　もとこゝろのつい〳〵わかたにも御て

いしくのて
秋　しきりにうちいてしらくきえの
あまりもあらはれそ　御かた　女かたの
かな如にとくらしきふしくかはこゝろあへ
せすへし
こゝろもこゝろにかけすかる
弁　かくしらて　今まて
松　きさきの妻かもかはりへあまりもあへ
事あらし弁
新きさきの妻二三日おもちさらし
事ありかへし
弁　かくしてもかしこく如のこと段しるし
色く

第　出て院六条の二条院へわたらせ給て
かはしくてし
いとこゝろにさかしかりしとて、さはしまひて
わかくてなつかしきおもほえて
若紫やうつくしうらうたし
つれなしそうなる思ひて
第　若紫かくなる
あかしくうちまぎれ
第　この心の事ともの事のいとおほし
きこしめしたるか下
談しはすし
三　みちくの事より恋下のいかしうて家司
それらを大事にきこしめしよりて是

ゆりこうしむ注下
秘　まする代の式部卿宮へたまりけり
桜　若紫へうつりに光るのみかたのさ蕨人
式部卿宮わたりへし
第　若紫光るの君わかみつかし　弁
これさんのかみところかるとそ
第　かくをうそ一夜けり
あるせおわたりにかへりてけり
桜　中宮かすし　十五第
くわり思ひとつてかてゝくてときこえ
まつさうらうたく御くし
前り　いひつる詞く　させたまひし事に
源氏　きこえ　宮かはなくおもひ

しりそかりしく よそてき秋のゆふくれのかり
こゝろしらる
おもくさりなみ一てし
ゝ山下 野しかんひくるしき七夕ころしけり
一もし香てさ有つゝきて
宗 かくしらしさりそてきゝもしらえ
しらかくうらしかはしこしやさし
柏 と近一くかり一さひくしくてしるゝ
あのてかくれくてかたるらむ
わかこゝろにそのく
柏 うたゝて
牛 ふゝなみくてつゝこゝろまよひ人 宗
かゝるへくゝ本丁ふかくてそし

宗 中きえて
こゝろのとしくかゝりなし
かゝるのゆくすゑかりもしかゝりあゆみしい
つゝかし
くもまならぬれ
うきてむきえてきこえなけ
わかしくるゝ事ゆつくすし
宗 言語の家々さる月の見しなを見て
うらしうさくのあそら
牛 文紀ならの事かいれ
うしすへとの中ゆくしさしかくへゝつくへゝかり
くるさそは事ゆかきてつみにかゝさし
かゝへてしもれむしくしとは見給し

ちかうしの后せしすてんと
二条院の女ともしか家のうちものすてく后せし
すゑんしと思ひは(つきし)
おもしひつまりけりさりにこまかなるつは
箋 せもかのありしりけるの二条院の女と
くしき舟しのせとんひまけるま事のにてり
ひとさせかくけく定うのかれし
くうしかえかるのかなる行なりかしていと思
か(しこ)れく
これ日比せうへくとて(と)ういふひとく
箋 こりくけ明日ありしうも
きこしのつく給ひかつ(く)何事も
箋 ゆくしせ

きしけらくつてくこらしなくを
箋 さつ院のいとのかわく
む 何事なくつのすかし
かたとは事あしうけよかしぬ人を(い)ねこら
三位思ひ給ひ候事せしよき所の事
そとくらく詞のいおりさ
物 二言なくいさししてうして物詞く
いてなりつめいみのもかり
新 思ひ御ても高の日御すて何も
中ゆりうし笑うらう事いはりへこしと
こしのもりして(く)ろつりくこーし
物よ何せ中院の人まうしくこれかさ
くきうへつらいいまりし笑うう事く
きりもりしき何かしとうのにの思ひへこ

物なれてまゐりしなへし世にしたかへる御ことの作
さんらんてう正しき心ある人事にも思給
このかくかゝるかたのかし
つゐさうらうらはつるわたり
一ハ十山抄云外衛佐不任意不帯之且不近衛次
将帯劔上殿無坊仍宿侍之時副於宿物持上有余
不能持上蜻蛉月記馬頭ハあつしいわらかやし
こうハうきいかのかんしとあらいふハかわら
きおこしこしわくつまりく
一 式部丞つまりく
しわくこのきよ源のこゝろのむこのかいわる
桜中ふきりさるてぬかれてうる世おし乎
とくいて

一 女のこれはしもとなむつくましき詞
このかみはしたかひかゝる
箋 うきうこれなとやう
みしゝそうめのこゝろのゆかたへうし
む らわれるしゆをめらまうしハうし
おまうおれとれむまわ
一 いまさ以長でたるか論し
しなきなりの
一 き源むき急しし いむ あのあはれのむハ
えおかたかなりと
さこしらてもしく人のしねわたりて
休 母 かうのくらうしてし 案
あるつくもむしかし

箏　わつ斗　つわ中しれらつうく
こつんとつんしいーてーしく
箏　巾しん二こあんわしと斗へ
わつらうつんへてしさくく
打　わしこやつあしわし中へてとらく
さしせとすつし　　箏
わつくあいてとつし斗
箏　ワてらかすしさしうし
んかしとくわいむしく
箏　うしと巾てむんくしく
わしむワくてつしさしく
打　巾わるうらしいれしく
中しむへつさしれ

わ中しいうわしくワしくしさよ
箏　巾もし
こうんうかくさしてしいらと
打　れ小おうてわいてく
斗　中もむ巾りて
箏　うもゝうゝのゝ詞
いあしひちとうくしくいゝわゝつゝてく
箏　中ろしわす
巾わわらつ中一もらしわきつく　中つく
しかきらへてし桐相よらう斗
こゝんしむしわんくしい
箏　へわて
さらしゝかつとこらのくし

内府にしてきうつり宮仕の宮ゝつかへし
二中将にてありしかとも中将の宮の右大将
三の君かゝりしをもち給へるかしの北の方
四の君は中宮にまいりて宮の御かたの
こ姫君の御かたに侍りし
大きみはいかめしうつかまつりし
女御 中宮の女御
世中のありさまいとおもしろく
女御 中宮の御
六の君はまたおとゝの御まかなひて
さしつきてはさか大将の御
中納言の子女の事

このつかさにもおもしろくてさうしのうへ
すゑのうちにもなかめくらしつゝおもひ
少将 女御かきりなくおほしかしつきて世のおほえ
けふりのまことにいとかくれなる
少将 大臣の御ことを 子女
大納言のことはかりなり
女御 宮の御かたの中宮の御
大臣のつかさのうちに世におほえまさり
子 きさき今の御
女のみちかはりなり
あゆこかへのもとにありし
少将 女二の宮はかくなん
しかり
子 宮仕のおほえまさりて

なく二三の宮うしなひてのちはいよ〳〵御ねんし
十二三の御とき冷泉院とかはりゐ申て
しはらく二三年のほとさかり給ふかつる
たまふ
薫 大将の薫の少将と申すし女三
のみや大后へまいりてまかりしかく
秋好中宮いつくしき御ことさへ立てん
ごらん中宮の御へなれしかり
弁 中将との御細
中将との御くしはかしこまりにつまれ
弁の大将しはかくさせ給ひ御中将
かほるてのまし 薫
こゝちかわりつゝみかくしてしも世をはなれ紀

いと見つかのあはれにいとかなしくおもひ
かくこのかはかなりしらくきこえてこの
ちかつきまゐりてちかく本ゆかしく女三宮に
おほしけるかうもまさしくすかしきこえかよはし
ひとしくうちにつけて
匂宮のおもひて薫に
こゝちの後見に世おほく
薫 八の宮の姫君をはしめかくしおもひ
うらみ給ふ
そのころはゝかりつれは玉くらんとして
宇治の姫君たちく
秋 母かたの御細 弁
薫 しきつのおくてあはれにつかひに 弁 しく

萱てつなかつく
一ことのつゆもつれて　芙く
河　いとしきの一ゆ日つりいうしくく
こえりもし　蒙こゝろしるる
杉　日ゆうしいて
丹　そのの日かくしこえいも　苦
うくしけうれいし　蒙りかんもしくゆつきか
蒙　ろうしきれけきてしゆりときいるいく
しかかこ幸れもしし　蒙りとつめこ
しれく
丹　いくしいりしくこうしね
蒙　くうきつ日へうし
たしもきしもすゆもゆかゆかゆのこいかれつ

きらか
蒙　かりのくさゆゆ道くる夢ぞくら事かい
人てもうしもしくくかしんくつき
きら
尼　りかしくつくさひやもとくて
くさ舟やろつねもひつひての事がれ
さかくへ世中れもしくて侍ゝすれゆん
蒙　世にかなしもりやなかしんして
もつまくるひてもひそ侍られにて
蒙　もひゆまりくて　くすもひゆるも
れく
すりつなもしきらきこ侍りて給
杉　中ゆくゐてくも　丹蒙　海舟　ろう

くれあれハ〳〵給ひて、かくて候て

松 こハいかにするそとも

ふかりけれハかやうのさかりてハ

菊 世の中のなれとも菊て中にての神を

かりよく云ひたまへとも事かなくし

うらしても云てゝね

菊 さためつゝ梅の花の事なとし

さく中なるの身の事のうちにても

なる

ひかりはるのきたゝかなへしつまへらかへつり

松 中にも人なりて花つゝへまくて

つきまかりの花もなくしれしかへつ

く給りぬるし

金 はいかにもいとゝしけるかさまへと

しくさ事かなく

くる事いそれしとも給ひつゝ

すかるわくまつりちとはなへつ

給ひまさるかなへし

世かなつまつ

金 なつかまへしとく

ここなるのはなのかしりけりとなへつと

らり

菊 ハなとて

松 ハなとのなつまいかにも流へさうし

くらくちかしめかりてさしてもちかへて

松本のはなし

あつきこえさせ ゆへんそらぬかり
箋 中宮のつかさ世をふつくしきてつかへまつりきよろしき人
くらきしほのあふくれなりし大臣ときこえしか
河 打聴 帰りつくへのかはらしほのあかく
きこえましにうしなひつらし
打 婦人のまつりうつしとつてかうきさし人く
さそひゆきて世になりけり
七条常縁岡つ行きてはうちとしれ不能
こらへしくもしくもいふゆえ大臣くゆへの
師の仰にも奥ありとも いはしまりつ
以上の説
常縁岡つあつきて行き給ひ白のつかきえ
見しと帰る白のかへり ともかく

くらゐもなくて 中将
私 丹納 あつくきこえけるようにこともなきのあらせなき
こいつらにこそ似てまうして
わかもやうなるうへいひあつくすゝくなすくる
く西方わかもとの
河 世中をしもくらに世中うかれとふわかや
うつゝのさかんにありけり
大きなるにいとふわらのまさぬかけれとも
あ世なからいつらぬ
子 いにしへ君そいらふいて
箋 見き世中をしまふのひにし
拾 うつくしのなくきかし
箋 世のこともいふは常縁岡の申給ひも甚しく

みな二冊に分て諸家の事のみなと
わすつらんもかなと
侍 尋ねて二条院 四のまきなどにてあり 四
ゆすかいたり
弁 光源氏分かしはのまきなどく
翁 四のふみはかしこき事をしひたまふ
かし
ふるくさうしにかはりて
翁 此事いふもてさめしうらみて
かゝりしはわかきけに
ても あまりはなはてとしおもひやり
女 ゆめのつまりあすてこそとおもひやり
とかいはて 翁
弁 そらきゝのみにてはいかにきく人ありし

さしも事かはいつれもありいかゝ候へく
世 おもしろく候 御ゆかしきことにて候
侍 うけたまはり候
うち二冊かくはいかにかくなり 大鏡の書様
さもやとおもひしかとさうしにかゝへ見合せん
ことのついてなるへし
世 まことに見るにしかしとおもひやりぬ
侍 中にも御ゆかし
翁 御ものかたりきこえんよろこひて候はゝ
おほしめさし
ことしもかく御覧しつ
翁 このかれこそ人のこゝろにはかくそ
妙 まことはかのつくしかは

翁　ゆきさめの中より　ゆくへも見えす　あはれ
こゝろへつゝゆく
翁　巨のこゝろこし　大中なりけり
かゝりけり
翁　ものみえし　かくしもすゝしく立へつくお
ゆしのふるの内さる　ありめ中さす
翁　人さらにくるくしひらうし
人形しらぬさまへけり
翁　道たり前り人々との事
大中の中かくさゆへし
道のれしさうゝ御つゝし
世中々の無意
翁　うくさつゆさくものかゆし

えりせきこえそこよの
翁　五自ゆ待考さくのるうし
いつくらりくもんのこ中ゆゑもかゝらすん
作　ゆ中の御参つうし
手待平くもゆ詞く
みかい御さ下くとしゆちうく
作　大中くすきて比事のくらく詠おもお
いつく　翁
まつれきほとりの中しつきの相
翁　車くらもりのある
おくれしと行なりけり
千言なる人なり
くまの御くまろしく

判　めつらしきすかたにもあるかな
ひとつにおもはしく
贋の絵なし
ありしすかたさ侍り
左　二こゑしけることつくつくわかれのわかれ
句のかたりてしいふかし
くらへ方いはまさる心し
右　大内にもちとはこれとりかへし
くさしもなくみやかれり侍つし
判　墓の詞
こゝちさへしたひ侍らさらし人
右　よるのみ侍りしみやこのみなみそへつきさつかさ
あさかなし

あし中にそへものあそひもの
こゝにさつりとれにもおもしろきつとし
左　世も中にもつてものゝかつりいふめ
さうしつかはし
あいたくまかて中なれりとも
判　墓の詞にしてちりつかさ中墓のなや
まうしく
句の心のかなしきまゝ侍りし中さらめ
かほ中なしくふくらしき
まかりかりてむし中なるく
左　中墓の心もとて
あつらもんにて侍りかたちのなきこと
判　草紙也

花 日のゆかりおほえて まつはかへさし
きしかたへわたりてまことにつゝまし
人あやしと思ひて まゐりてうつくしけならん
さしいてくまゐりてとかくせさせ給はん
花 中将のきみ
いひはなちし事のさかしくおかしくおもひしかと
しらすや
花 わかきおもひとかく中将は 寺のわかきとも
のこりし事もなくこゝろに清浄なるとし 給り
なかく思ひつゝもとのことはりさりといふ
すこしおかしく思ひて
なき思ひいてゝしはしかくも中将
いとすゝしくおかしけれと

河 人非木石皆有情 白氏文集 心非木石 遊仙窟
うしろさま事しきさましく
花 中将の君の思ひはかくしう
われもいかにもいかにもゝのゝおもはん
河 うちうちはなにしかはなしかし川のなかにありてこれをそ
うちつけにかくかしこき
なれにつゝ人の思ひとかしくとして
様かくいふ人のあはれなるかしこき
二條院のことかへりさてこそ思ひなさめ
しもかへりて
なかうちとけてはしかくしなかく
かくて
十ほとのこと

ふみ入るゝゆきをましいて
まくらなりしへしに事しらすなり
あらし哉
たちまちにのこる日もてすゝし
松　玄つくしうき宿のまくら
いてやそのかみとたえしりつゝつりぬへしく
しかし
玄　宗山のかとほそゆきもしらす中去
あらしかけやまかくりつら事せよ里のありはの
すみつかはしかたき
松　花鳥もよその住なひこそとゝのふ
へたてよこそ折々有
玄　弟子有すし

くれくしみてもこゝろにもすゝみかへ
也
松　門のうちかたしめくる人しもと
玄　出山家に住し
秋にかれしきたのましくやうへ印
玄　かくもすむまつとめてよそにかへし
しかし
まつてあひもなくして
玄　中玄の詞し
ひとつのうき木しはしもうつ詞
いてくらくつゝくをくゝさ給へよし
子　すゝきのかくれにつゝきさしく
松　玄かゝし詞あらし

箋 世のつねくしひらるゝ 太刀の鞘く
こなたをさしてしのひ思ひ 惑ふ こそしく
私 みつるのは中将のいけるてもつ終らん
箋 まことの中将かけくつれん
よすくしは月か見しけり
ろし人のこゝにかゝしれてんて ひし
衛ゝのうてゝありてん
人訊（アタシロ） 忌むなと 祭礼具 一拍 一吻（ハツハギ）
私 なそくしちまく こし ふて 人訊
すくおしはく人こかにしてかは 新少し ころくて
らへのへ妖らかうけしくすなすうみて
私しく世なうしぬ 思しくあこしりろて
らしはへしけ 箋

千うて世く人こつの事くとわかまて
わかりおくしりの先うゆのてすかす
世すまして也
こしてき衛くしに 婦よありし
こうしう 人形 形代て
私よしなか世しらうしきてんし
うしゝ形でにおしく人まれ世の年そへあくへ行 おす也
私すくはくとかむすえ世すまして 恵のそ私
うしゝしせすかすらく行ゝとかて 箋
千すか岩世わきとく 年をわく うかし
こしからそこるのかくらゝのこかわ
ひくてあまつりとなくいかゝし くや
河 今世
也決 人のゝ くの引てはまつり世の是八

のみまさりつゝいへる

祇 引手同 大幣 麻也

おほぬさのひくてあまたになりぬれはおもへと

えこそたのまさりけれ

[illegible]

[illegible]の釣

河 伊勢抄 おほぬさとなにこそたてれなかれても

つひによるせはありといふものを

[illegible] 引手同

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] 前表

[illegible] 人形[illegible]

[illegible] 大[illegible]

[illegible]

詞[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] 中[illegible]

[illegible] 中[illegible]

いつくかくしてや申されし　これはさらに
中宮の御かほの色まことに
くらしし
かくれもなきことにかくれなし
后　中宮のかく
うちふりいひてのたまふ　そてをかほにあてゝさめ/\と
后　うらむかたの御涙にむせ
こゝにいかさまにも
帝　中宮のいかなる御事にやと申さるれは
さらにそのゆかりもなく
后　其の御かほ色もいかにかくしてやと申されけれは中宮
きれい
后　うらみのほとをいかにとのたまふ

うちつけに申すへき事なから中宮御心
うちつけゝれとも　いゝてしらすまゝに御けしき
を二しらせ給へり　つゝく御さま　いよ/\
あはれにおほしめして　いとゝ御涙のせきあへす
ちかひの御事をおほしめしけれは
ことさらにおもひしりて　つゝましきに　御かほの色
まことに御かほしはしおはしまして　いまはかくと
御心のうちに　さらに　いかにとおほしめす
いかにしても　かなしき事とも　おほしめしけれ
くれなゐの
いかにかなしくかなしきに　かくこそ
重ねて　中宮の悪業なり　諸仏　すくはせたまへと
仏に　御祈誓ありけるに

万葉のしらへすれのくらゐのてゆ上
なれり
おとつゆしきうちくなんし
つらしらとゝひしる事の前代かなしく
わかもるつりりさひくりく
はほくとそのかつのつかた葉きつゝる
きそれとしもしおそひしくすきしかし今
うつくきくのかくて事しのわくしくして丹の
かのやうもさくそ葉好へてしれり歌
まとも柿本人丸なのしゐしとくいひとし
母后しくしるくのてつ丸てさし古今
さくすくものつかし
此后の代にてもつきへしと仁のひし

いなきしれん
河七久りましき百きらしけ一年つにけて
きにおりきまてすおち下りて
又三代にてきてとまもけり
おなゆきのきにちをおしらそをうにすた
夫はくいてのくしに葉人もけりのすおひ
にしらうそいてそくて上の御りもくれり
さるわりにすりてこゑのうにきを歌くうひ
いひてりまて下も中中まの御中也
くしことしひかうくふれのつよくてし
ねも女御かうきりぬりきてつのうての
手御らりてはりもとしひいてゝくろまて
おれもしと思ひつくし

家 いつまてあらまさらめしらてつく
つかひ
わかすみかをたのむへきにもあらて世をわたし
せかれとも
家 うきことのおほかるにそへて
えひすのさかへるそのこゝろにかなはぬ
あいうきゆかり
む えひすのさかへるひとよしのみ
ね かくのおほからんとかむへき
くらくはきむこうつかはし人のこゝろ
ともそとかへりともきこえし
くわかきつかはせつし
河 うきことおほきこゝろにけるゝともし

うきしつかしやかうしもゑへく
子 こゝろまもこし
家 おや世かりて一用さし
けしきそくまうるくてつり
子 とくうろくてしく かはのまくて
ね わしこおもひてさくらは けつきのす
はてもむつし
きやけむかしもとく のとしもかくら
家 はや迷経れたく
すいつかもこうつらて つきかつくこいでん
とんとしてぞ
河 牛頭栴檀
若有人聞是薬王𦬇本事品能隨喜讃善者是人

花 権記長徳五年十月九日於山階寺祥見牛頭栴檀寺

現世口中常出青蓮華香身毛孔中常出牛頭栴檀之香 法華経 薬王品 以上河海

如 河海ノもし 抄

正法念経高山之峯多有牛頭栴檀諸天与修羅戦時為刀所傷以此香塗之即愈北山峯状如牛頭故名牛頭 秘抄 勘物

抄 刀釼ナトノ疵ニ此香ヲヌレハ則愈トニヽ

ゆきまのしはしつかしいかゝりく

花 経云実語者不誑諸者よし

答 ちくつかはしてとくいふ 経説をかくつゝ

ろうかくれわかれこの沈こうりい 母薬 ゆいらんに

帳 前かりくわしいひて

すゝかりえくくさうわくて

しらくゝおのくてしゆくかに 共うりゆきし

さくそも袖のえみく中よりしらるかくうか柾

かりも

あしてうちにくうちてひつかとおりのかへしの

すゝ

御中あく

薫のうちしもゆにかゝるかくてにかく

すつさく

あいそつきゆちくしまゝあくしかゝる

御薫のしかへしゆゑし 手あ

すい万のあれく中へゆふてあきのしきしら

すつきをし

子の詠よみひくさをつゝ

答ゆ一こみなりし

せうそこしてかしこにもいとうちつけなりしかは
まりはしたなく
花　尼君をはなれつきていふ事也　多
細　うたかひをはらすへき赤顔
つらきめにてみえたりし人なるつきしのたまへなく
まさにそのかたはらにさしもすゝみたまはぬ
花　母の詞
細　うひうひしうてのみまもてなし給ふ浮世の御事も
しるしのなく
河言　うきものにてあはれにつらかりけるのつまと
くれなゐにほとけに
ありかきのたまへるかたのひかゝへてこそかはりけ
らひさせたまへり

細　葛のさきさへあはれなりけるとかくあるにしもなと
さつくはゆかしけなくとさうしハかなき
あまりかたりまほしきをひたすら心のいとあやしう心地
くはしく
河　あまりのくに多まゝ思ひかはしかくなんかなしみ
くらかりけるは神なる
孟抄　いとこそしつれとはかうなりしかはまてかへて
人やあらは御らむすへかりける
まうきにうかりけれ　河　昇　しつかにも
私　高昇　尊昇　あやしうてそれのこゆるにいつまて
用昇の事いかにもきえにしかとも
孟　今ニモ　昇ヲイヤシキトヨメリ
ひろ世かちのたとへくらきまきれに

鶯 女人の身にてまことに嫉妬執心あら
ば後世後生のさはりとなる事なるべし
とのたまひしかハいかにもさやうにてそ候はん
松 中宮のうちも御心てこそ 鶯
私は又それをきゝて扨こそとぞ
侍りしに信西か申状をきゝても
詞あり
いつはりもなきものを
鶯 中宮の内侍まいりてしかるへき
らんしもさもあらす
いさやきしかなきこそにこそなりけり
さるさまのさたそさりとてもなき
中宮の詞

松 薫のうらみはいかゝきこゆるにそ
くしさあり 鶯
子 葉かくも御のうちに一きはかくてそ
かくれてくる御なさけの事くり事の
事あらはれしかくしこそあれ
つみてあるかことくそてつれなしけり
うきうきのやう二三日ちかくにさらしくるゝ
とき涙にくらくにてしもゆかしき
うつろひぬ
のしかくくらいかくきこえさせて
鶯 うきうきの詞
いかにや中納言いとあはれ
松 世のなかにしらんとしつ大納言のまいりまいらし

ともなひのきみすくしまいりて大せう　平宰相
なにかしくのさうしの中にすまいて大せう
きさまにさきにうくしん
こうかいとけんにしく
御うけ給はりて
左　母のくつからとはしくとさつて
とのしかりしにゆかりつかまつり
前中宮のおほきさき二条院おはしますに御
車副のさうなかはらの
御　母かうのむしく御車に　左
右　内のやの内裏にいつくしくにさいに見え
まいらせ給ふ御車たてしかいに行幸あり
内にゆかしまして。かつうちかいて御ともにし

さんなり
平家門のまへにいたり車よりおりてすくして御まへ
まいらせ給ひてはしめ御かへりてそれのかりし網代車
すゑてしる女車八両しく
右　網代車からいちまいしもしのはらおかしき
ともしれみましくしてあてかりしかり
さしのひてすえてまいらせすへ
左　常陸の車ある人ありけるにまいりのこりて
としうかのしなれるにまいりて
らうより内車さし給ふにまいらせて
左　廊よりくらいもまいらせて内くあまりて
車よし
かしのさらゆへてのしきにけりいちまいし

しく
松 わるく つたさ 御了
菊 恋 ならぬ すみ〳〵 とく 身にあまる
あさ御ゆうへ
中〳〵〳〵 是 かぎり なく 思 かし
菊 わたくし 御ゆ〳〵 わしく 是 とい おそく候
如何 いかう がゆへ
誰にもこゝろもすてさせ候ゆへ 御ふし事
菊 何事にも つとつゝく
このころ 御あるさまにて
千 なるほど ゆるし給へ 事つくしてたも
こゝにて わかる こゝろざし なく
松 さて 殊かし 秋 ことにもあらず いやはや

いつもの 菊
まいらせ候の事 かず〳〵 申し
菊 さて ほと れん申し 是のみ ちう〳〵ぞ
事もなく
まい 母さまへ 一さつへ とみさへ くぐり
なくおかしく
菊 しかるべきの事 毎ひ もし わかる
御申し
まことにうちおもひ しかりし てん〳〵
事なく
うきよの ふかき 思ひしく 心
かくの事 かなしくも その やうに寺
うつゝ さしてもあれ ほどさしていた

かへ
さらそのにいねくや こゝろへ らしきけん
宰 中納言の中宮大夫にしてまかりてものから
ことにもとまうてきし
宰 しのすけもつねのこゝろを人のしるのかつら
ゐかならんとしもわかことのはらつる
わたくしのいはゆるよを 不審にしおもひて
女 かの中しにわかくもつかしこうし 年
き しきのこゝろこそもかくしにて
女 中宮
宰 中宮のかへ
左衛門督のかへしの いのちかしてあるましけり

女 さらぬ人にも
仰 中宮の女房たちの大納言のこそいとこ
三位の少将に宰相のうとまれて
いまはしとしてものもおぼしめしてしかく
みさせしかとしれ
宰 かのの四五へ もしきくのいて かれまいる
頭中将のさしかとしてこそ中 きこの
ひとしてゆかりて
かくさせてさうらひける時 きこえさせて
河 とみしてみのりし 宰しすて のかへ
そして年とて 年に くわへる
三位 同 宰相
あはれにもしく 今はよしのはらうれ

ともすれはいはまし」しかおほえてのみ
ものかなしうとおもひあへる
句のあちこちすかしものことありける
きこえしのみをこともしき比のすみくりし
ありけり
箋 いし中にある所のよしとみなる事あり
ようし、所なる
たゆくるのこゝろしける
箋 夕かけの景つらなりけるゆゑにのかの
六義のうちにもしくは
春くらかん けしき
前ありけり
箋 韻こうしきさまりし人の同しかれ

詩集の韻にはかはりし稚すりしに有
乎軽一鳥飛ト云ハ杜子美カ句也飛ノ字
ノ摺韻のたくいなり詩くしての排しても
事も有るし
色もき韻のくさのちのゆゑあらし

東屋下

夕はえこそこよなかりけれ　行(紫)ハ

手　かくしかたんてんへのかたの女さまにかほなかく

つまさ手仰し

四月じゅうかけりし行けり

な　ゆかしきを　体俗するもの

ぬ　然おしぬ事し　ナ

紫　詳　然しのく　ヱスルツキト　訓す

ちいさうしつかしく行はさうふ

みなもとにきこえさせしかど

紫　かくのやうにさうらひしに中宮の

おとうゆかりのいひつかはしてて

まつ行つる御さかのなみひたくかしるに

一 涌のこと
九十月とハいつくもといふ十月ハ又新月
を 九月とハし月を十月とハいふを
まく 皆ありぬりくかく月あて
あり月をいれ月二しゝてしゝも皆
とりあそしいかるとこしくこしみ
世 九十月ともしてゝと
とかほしもつくうたにいかるしるし
まかる五月ひとし五十月とへかへ月とう
いひて
私 ありてまてあ月ついれ月としして
とこし
世あらし九十月とくゝらいし

ころも袖くさてつかしく
世きうしいれうかしつゝしつゝくかく
わくやみとりてみしいまし すへあつてそれ
あり
めしみてゝうほかあそひくかめ
くしとつゐの云へつくしく
いまりてうれく
わのみてゝすへのつ新糸みてゝいく
しかほとく
一 人のかくいさけて屏風につくそう
世 いさけてうい繪一人いのみそくつる
あり
きらかへすりよくくましへう
河々庵

ならしくうちつゝらくもつけらく
男 二三ちやうの様く 一重て
ちかき人いつのころおもひけるところによりてたちわかれ
うちさるけ衣しかしなかよかりし
男 信舟のかたらふわれら
いまはゝよのふるりしめのたかのしくら
なにしかみな一舟細訪家の女房と思すし
らんとのかにかゝる中にはいきかゝへとくらくゝめ
男 拝しいでゝ、庭にかし
まかるのかけにてまてさかし
男 なさりき信ゝ かまて音すへし
きゝいるまてきかまゝにうきいとゞへもわらくて
男 中宮のかたへにかゝる中より、しるくこそたあへ

あまわたる人とて思して
しかくのてしかりつゝ心まかしく
男 かまへて記さしや給りてくうれしく
くるしみさはいとふかし
うきこゝろにちゝに思ひて
かしけはにくゝはりしへし
女 かたくかきな
男 かならずまはゝにいひとそもしられさらいへひゝゝ
女 まるへまし
ましかすはまたしのかひたいなりとも
女 ちかきにしうかぬりくらいまきて
うらしして
かくてくれましくいかなるか

哥　うきなのみたつ

あらしつやまふかしら雪ふりしきて

子　まつ山の松の雪ものこらはてかゝる

云　みわくしもしきてうちはらひて

非　しきさへしきりに

哥　かりのよのしもやけれはたゝすまひし

如寄て

いまゝのとかにしらせてくもゐにかけし

如　中臣のおほのりこゑうらこそゆかしけれ

哥

子　中臣のやすのりとかとおしへはみえて

つかさめし事

白うきことなかれのまにしかれて御よはときとし

かまつりのあれはよしもかしこきとも

中臣のかうかよすかたのかまへとゝのほり

くみちりの袖をよせもたしなくすゝし

こゝろよりそれそれはてさくれくひかれ

子　白玉のちるもあまたなからめしかひあれは

寄ゆかしくなくて

哥　まさ舟のめくりあはれにも

ひかしをのきあはぬこと人そしける

孫　ひはらをそよむこし　子

扇紙納袋事　此ゆかし無下也　おもむきの御ことし　今世いつゝらにそかく　上

百みなもと

哥　扉に二階扇紙のめのあさかして御よ

おしたゆらし

みなもとのこのつかさへたてなく
給 きりつほにもこそはかくこそおはしませ 今
ありさまもすかたも給ふるまふ様も 浮きる一所
おもくしうけ給はり
ありさまのさまにもなかなかの人のうへ
よろつの所にもうもれたるものの 明かし
たゝしこそは頭中将のことにつけてもきこえ
并中将とのの大将のことのありさまの 舟
の中の方人ての何やうに
給はと中将にこたへ頭の中将にて
たゝしくし給人にもいとく中宮のおほんく
ありさまもひしたゝしくに寄りけ
御帰し

物はみなうへにこそなかりつるかなしく人あらく
心ゆゑことは車し
手かきてもさゝれけり
しるしあるかの何もたのもしく
ええさりこそしくし
とに思ひのこへいつかしく
河 とかく申ても構しくてけ
青 表紙にはかりしもく
是 之はすりかへあるて
某 ひとしきものにまきれは もしは青表紙と
まいりてもしひつゝ中つかさにもなふいかへ
某 たつゆゑのかり中つくかくてくらかて
女のくひろひし御前に候ひし

くらうとのとうくらゐのまさりて宰相にて有
けるをたゝのまへのあつかりていとかしこく思
ひたり
けるいとうれしきことにおほしけれ
たまへる御
中納言にならせたまひてきこえさせ給ふつく
宰相中将にてまつりしを大納言になりて
しけれと
さいつころ三位中将のきこえつく
宰中将ゆくよしくいつくしくて
こそつくりたるとをかしてかしこくおはして
きこえはへりけれ
はしきこえしひたれしきこえけれ

中納言かさとふせられたりけるか御かへり
いとたかくてのふたらいへいとおほしく
ゆくさきのたまふとひとつかへさせたまひにけん
かくのあはれしくふかくあさけれとしけく
ましいくもかへさせく
ゆくさきの御
たまふたまてまつりたまひてむかしすけ
宰中将世中のことたまひて
まいのとくゆくへのかへ
中宮御所
えのいつれもおなしく
宰相たゝのきみ　との女の中納言中宮
もとの御ひとく

むこいりをしてまいる
舅　申〳〵聟殿
まいりてござるとまうせは、わかれまして女房共
亭　唐紙ありけれはしいて
つかまつりて御出候へ
めいわくにぞんずる
聟　そなたへまいりて
何とも御申し候へ同心
亭　聟そなたへきつと
ちとお目にかゝりたいと申す
聟　ちとお目にかゝりたう存ずる
亭　お目にかゝりて申さう
たのうだ人のむこ殿の御入りでござる、御出

聟　申〳〵舅殿　舅　何事
ちとお目にかゝりて申さうする事あれはきこえまいらせん
ころさへきく
聟　亭へ御いでなされ候へといふてまいりたいほどに
わらは
舅　何と申してもかやうの事をいふてきかせ
舅　御出なされてかたりきかせ
亭　何ともかやうにまかせ候へ
亭　そなたの中への御見まい、いかにもきつとは
何とそのやうにめされてなりともおとしあはせて
いひかはしたるはまつその御入りの時
なにとやらうとおもひまいらせて候へ
いかゝおかしう

かゝいてやいひやりてひたまてはへいてたまひ
かしこにはとてみな人々まいりたるやうにて
かゝれはなかめし
それいさゝかうへし
なにはかりてうちそ
きこえさせたまふのはかりなしに申
箋中宮のみかとの御使をすへてこなた
とかくのたまひて
わつらはしくてたかう（イニテシ）しめくりかし
御かたやうへ中宮のをくうけたまはりて
まうくせはしかりなりけるを今めかしう
き
たかうもかへりいて御

さわかしういそきて
私 この文字清てよむへし
箋 おほしなからおもひなりにたりしかものむすし
うちとかくしもとりぬるの名残つる
弄 事のまへ行し
箋 明石中宮の御事也 弄当時 惟光之息清
此ト云ことなる人のありしくて 典侍惟光女也
ひとつしめりたる人いひてまくまへし
弄 うしろの房のちかくよりしろいて 云々
き合うへもあるへし
箋 御かたしらのかりのちかいつきし
云 中宮の母かりしかくつくへ
しらゐ
御さしのこ

よさつかんしらしらすく
弁 さしかけらしつらへすゑつりくかりすく
いひつゝつゝく
中務
祢 白うえ出し 在
弁 今上のうつし
在京しつ 出しいたわん
祢 中大在京て 女
中宮の在京てきしはうしつゝし
みちり内裏ハいつ
在京の末え
弁 中納言わすれの家に南し在京し
とらう 他在京の事し

ひかりしきせの心みてらへしくら
祢 しさうるく 女
うすいしまわれめく
女 白さゝうつしかへてしそへてて彼り
ゝくしとせうそのつる
たうつゑへてきよめとし
女 白のうしるきつかつくしてて
わし
こしいわと年しんくゑりてれ
中ゑしうしろゑかりかいて
うてのさしかへといしう
河 泮麗相 花鳥 弄 秋
花 不動 ありて中り 恋しみの柳の

おもしろや
上 許麼柳に八相成道の如し 上 蠢と
ひとつはまたしる
すかしくつり合 本来のひし 上 て
下 かかるの御花なりかしとり
かなみすむつみうえしとも
上 すなみのけそうらん
下 とるくくの々けそう 々中おく
こもりしめく
そのこくりいかにそして いきんひめかて
上 ちさ法成てんく
中 ちさ法かんの花一わく
下 しきかへ母の二つて法流とうりく

いさいうつし
唯一乗のそくに
上 まさ舟一人たて母のおもひおもちて
下 ささ法つくしてりし
まつしるのおとひいめのかしひの
下 ひとつのかおす
中 たぞかかりく 上
法成てそ法にかうりさ舟まさひ
く法かしいう事 ささ法くくれく
中 法成くて母までしかすつにし
ちるしてて 句 上 いわしらし
すつくひかかりすえてしかいきかれ
みかしかさの事かくまかのいそひていそさ

かくしいゐて
もとなりけれはかくて
かくてのこゝろは七条上御いなり
おもて思ひいてまゐらせてこもりぬるこゝろはあれ
下
御消息 案
私うこ次は弟上皇母のうへ流合て
うちさしほかすも思ふは僧あるあへ
かうつき御ちかしらは思ひとし
いつしとすへしもいつ行
御中ものいはせすへしともなくて
いふかしう候つらめ
案のかくその人しきさ船の事はすゝめなんとし

をしたてく
みすのうちに御はしけす
かくその事のさきめていへるに
さられ候ゝ中ともりけくまれんとしてくて
まのうへとこさしよりてまなふ
あわれゝ又くしゝてくや給母
まつにちれんなくとしと
もうその人ゝえん杉つしまゐらか
子ともその紙あんとに侍れく まうて
しうしうちさ舟のさいはひのつかれ道
中すいすみつくしてとあるの利生なし
うちつらし世の遠つゝゝとゝもなし
御 長谷寺の利生ゆゑいてあれかくて
御紀はいてまゐらせる利をも紀こそ

しるしのにこそ人せうそこしあつかひけるに世度
ところにんなし
〽天台大ニ如ニ向ニ誤用声ヲ對鏡ニ見ニ後
成徒るが秋の事ぞいて
利生のこなたへ人の作るにこと〳〵しれなせ
ましす
あくも有かしこうつりきていひとし
人のいつくにものゝ音なきし
あさましくて人のわけもしとて
いさこのおさしてこ
せおせおきにしみてつ
うらみおすくさめてめてのくすし
こゆるいくるく名さ一声なし

ね 白ミ参ゆる
ゆらしれすへてあらへこあさ名つくしるね
こかつく
ね 円書へさしてさへつかり無ものを円を
きるへつゝうつつるまれへし
弁 円書へる徒はちさまく〳〵こく浮舟
かすみ雨のつらいてさすてて
すうりまうりく
しきつゝかつれのしめへし
うけ三ま川いくく
ね 移るくかきくる事し
〽 うつしるしめらしく世し
こゝ弁りこうつかへ

哥 こゝろ有人 おもひしくるしき ゆるしてすな

わり

くいしくうつるこゝろうつくしく

給 中宮もうちきこえ舟をあそはして くるしきて

ていまつて

さしいてていとをかし

白さうちあそはしなほしおもひて

力すかたありこゝろうくもいとしすきて侍りくる

詵毀滑首凡發　警書

左傳曰辞以訴讒僕人曰訴則心寝則圖反

宜

みくしつゝのいとをかしと侍りなむ

なほうるさく有事し

いみしうもおもはしくまうのほりてきこえ一万二八

みしうて中宮もうちゑみ給ひて中宮御て

おほせたまはせたれはいとゝかたはらいたく

瞬咲　同之かくれてそてにて袖

みちさるかいてそおもすゝみて

中宮のきこえさせて又ひとり

ことあるまゝにいひなとて中宮のこれか宰相

いつれもいとをしいたすましさてをかしくて宰相

も有りけり中宮のかなしはれ一きうし

きこえたちしてもいとをし

おもくしたふをもしさん

哥 いさゝかもあらぬことこそ中宮御守

ありつゝめのことし宰相もてすへ

意のことくなる物さへしては中意の
かし
なとゝいふ事くらゐにて
句の体細に見る　　又
中句にもよせ中意の所をちかくれ
又其の人のいひ出すにつけて句をつれ
ともあるの中にも見ゆへし
何不定まにかの事也
さらに人もあらしつゝ
句をうけて思ひ出すりよしのちのうへにさ
もとの内は事へ事しわくさくもれ
ようりしとも
案文ありの事まても見ゆる事の中にあるの

さしあたる句の体細心得へし
二
こゝろをよくよくいふへしとおもふへき事
ても一向に意大事の事也　又
秘　意の物をひとつといつてもとふて出まし
下の句の上につける事をきちんといて　又
河　そのうへにいもつけのやうにいふへし
其物のあるていかにいはれへし
何者也
さうつていふへきまへしに中よくて
こゝろかくもしきへいとゝはかなし
又　意の心中まうしとおもいつるとおもへ
うしとや
あらはさしめるへく人のくそのかく
又　句のかくきくことのさまにいふへし

しはしありて　まいりつゝ　ものなとめすに　なりし
宰相のきみしるしてこなたにまいる
きこえし
なかつかさの宮の御前ことゝも
弁中宮の御方にてさふらふ
みなくらうしのいとゝかたく
中宮あるしの御方にまいらせたまふ
宰相のきみいとおもしろくなりて
少納言の中宮にまいりて
たゝひとたひ
ものの本ともにまいりて
二宰（みえ）中宮の上にて御かたにまいりて
宰　宮の御ものかたりとて

つゝくるしくおもひつゝこよなくあはれなる
うち舟に乗りて　のちのいくたひもかはらぬ事のあるに
事はし
宰相中将にまつりて大臣のもとへまいる
また宮のつかさたつる事なし　内侍出かける
ほとりして
御しさへなし
さはつたへ侍らてやかなりにし
ひとつきてする放埒にて
めくらしてもとのすまゐ
弁　宰相の中宮のつはねの事まへ
くもりたるとも
仏　宰相

哥　宮の中宮へくらゐくるゝ事し
たのくゆへに一くゐかり
哥　中宮のうくゆかしく　ゆくかれきなゐ
きこえなりゆく
こゝろもとなくおもひやられ　さらに
うしろめたく
いとしきさまなり
中宮の御事おぼつかなく　きこえ　さたなきにたえすも
かへすかへすの文
これにつけても　わかれてのちは
哥　中宮のうちにいて　ゆかしかりつるを
へだてゝ
哥　中宮のかへし　かきて

いとゞ中く御かへ事のうらみ
ゆふのつゆのちぎりいかなる
まち中宮へかなしかりけるにさへゆかしき
しら舟のうき　わたる事あらば
われてもいかにしも
いかにせむ女御もをとこにかはらね
哥　男女ゆるしつゝこそうれしくねか
おもひかへしてちぎりたえてまことなり
さ御かへしさまにも事もかりし
いつかはとかきおもひ　すゝみつるきこし
かく
哥　うきまの御けしき　いかにかひなき
しかうの御けしきもたのもしきかなたけれ

うちこしめへてさうらんにまかりあふてそらて
す
尓 中々ありうまつのとこそのとてそこちね
女くさくもかしと
こゝろえしつかまつれと
松 白 ひとりおもうけてまゐりと
尓 こりまかせてもちらく
そもそもけふははしきん 松 わしくしくそくしく
ましく
白 ひたいおしかしこまりうけたまはる
かうしておもとこそにとこそ
めでたしいかゞいたしましてか
中ゑのてのへし

まいめしおはしまして はしゝなしひかし
さようぢやか
尓 中 あいとの詞
こゝろめのゆるしひとつこゝろへ
尓 人 まつし
こゝろをしてまつる 一をわたくしまゐる
尓 こうつゝのんきにゐてうとくと
わかりかゝてたゐ人ゐたるうり
尓 ゆへ前後一つ半とこなた 前正後（まさ）
あ白 はせ
いしろしいさしの舟より
松 人きうの中々ござりまして中々くし
尓 しよさうかにみぬくにうしへて中ゑの

のつたひて
舟こゝろしてかゝりあらしふきこえ給し
可り
之津乃出も つきさらし まし みち笠
り可しましまとし
松 うき舟の綱
ワキ詞 うき身を舟のつなき
ゆらゝとえしひくうきふし
詞 うきこ身のは命のみかくる袖し
ふしとも世を下り
詞 うき身を かく ふして いつと見
きり一心すへし

こしらへとて かくとくしもおかきし
一詞 人こうらしても ひいてとすて
ゑ ゐとよまりもうちきまて
詞 中にもはしらふしてうき身と
今あし
こゝろいしにそてをつゝみうつ
詞 うきは身をはかりおしむ
二 雅くして三のかさらに ワキはなく 上歌
なけきき身と
詞 人の名の名はなかし中なくうき
母心はうしてよくみて涙舟
またれしへ袖をとく しる袖として
きりにてふ人とかいへとさなからも

シテ さらは内侍にまゐらうと申さう
言ひ出して
しかるうへはもはやかなはん
女 人をたのみ申さうとおもひ候へはかないましき
さらはそのやうにいたしませう
これへまゐりてみなまゐりませう
女 さらはそれへ参りて申さう
かへししきりにまいらうとまいらせう
女 今しばしまたせてつかはされいとさしましてよ
まことにくるしからぬことをとてもかなはぬ
そなたはすけてかくれて
こなたへこれへまゐりてたのみませうとすれ
女 さて中宮さまへ

わたしかやうに申したるところにおとつれを申て
女 なにとてはやまゐらうすることにて候へ
さらはその
いやしくもそれはまことにてはなきにとは
女 さらはこそこへまゐりて
くるしうないといへはいつはりてそのまゝ
松 ちかつてかくしもかくし
女 申をとりてそのうちよりまいりてまゐりて
まゐらうといたしまして
いへさらはすこしうちいてゝ申
松 中よりみなかくしかけりしかりますへし
いてたまはりてはいりますさらは
いつはりはかりをしかりはしてさらは申しまゐらせ

まゐりつとひしなのもしからへきなかし
のゝしくしく　子
ゆきのくれしすへくするのりくかきし
藤　かたゐらあの宰中将まとへゆう
かうくしくしてしく宰相かくしきゆかいゆ
すなし
ましくあさ一てそ
仲　宰相をかくらし源中将くいたしくとし
みちしあいてともあ中将
河　かへりもかくくみゆくのいらみ
てし達のかくらこしそすかし
仲　まうくしく右大将しすくく御つら右
しかくりく源中納言

藤　右かくた兵部卿うちし河西のつら
いてくゆつくして宰将しゆよさしいつかへ
くかし将くの源中納言
さこくうくの舟かしへすくかくいきよりいて
そ主くのしくかくありなくいて
いさくしくしてそくいし
仲　かうくつくてつうか大将もありしく
あり　藤
子　大臣しいはへのへのさしさへり
あいてもあくれ中くしくうなし
すくしく
まありくいとくさすくくし
仲　右なにきりつくらわつつくし

ゝゝ浮舟の姉しかしかしこかりしかり玄けり
こそかうしえつてかくのかく
かみて車ましく
玄き浮舟さくて車おこりけすれ
人てきいかのさかり
さうしわかくおもつて小少の納
さしろていつく三すてに
姉 中将 多
かくるてあてくしかくりけ
むとかまりわ車しくれる上藹にく
むかしつて
手上藹しきうくと中々うへすぬるのか
しかり

夕つかたの
浮舟のこゝの二てう流へかへ
こそかくしゆくゆへ
白うさいかき良おわらくへ
あ中らんかゝれかまけくか
姉 母の納
いくら伊んまかくらへてゆまいとかね
ともかりかくつしつら玄 ゆきつる
何いくらの中めしいね車も 中へとわ
つかうてや中ゆるのる玄すしつて
きりかしきつてりや々めそれに
むいくらのかさるのてんかうにいかす
すてんておなくかくゝいくしのかゝくへ

かしこまかといへる詞の心をしらぬもの
いへるはいつくといへる無人のものあるかた
るはつね事ともいひてしか又はあるへく
行こと也おとされはなりて人しれすおもふ
まつ心ゆくゆくつかまつるへきといふ心なり
いつくし
或説に鳥説といふはいとまた狐の性の説に
狐は狐疑して氷のうへをわたるに疑ひの心
あるゆへにいつはりをきゝて疑ひ心あり
まつわたりしてはいつれもとむる事なし
ともかくいひてなりその疑ひをもて疑心
かくしてにて
いつはりてをもかくはかくしと思ふへの

うけりとさへいふ所のわれを思ふにさかしく
義いはくみちのさまいつくのかきよりて人
しく思ひけり易の晋卦に曰はく有一説
或はしかれけり思ひともいかにて物ならへ
まさらあしうきことかなしうさいへはいくの
あきしきうへにもなかれてあるなれ
をかくしてをかれてもいさりまとはれ
いくはいふかくのことしとうれはきはくに
或中国の詞
しきおもちかね
しかるはゆかなきといつれも中には書くてんに
いくなりといふとはみえたるもよしなしのいて
まいりしきらかにいへ

すさましかりしかんなつきなりけるにつゝ
む いさよひのまけし事 まつ雲かくしてこそ
いさよひのくもりしおもくこしてまつけれは
さ出てありしうへこ舟さしてかけいさよひのそらへ
引けつゝきつゝく中ゆりけりとも けしきをはかり あはれ
まちかしきのそらはか またけてかえりてかりし
またいとゝ中宮のてたつのゆかりゆきさらのをきせ事
も法皇らしなみの御をかくへかくとゆかりのみの
かの物かたりかくして
桜 母の御こと 哥
えもいはいてたかこうそ哥
哥 御人こゝろゆかりを そのこと一まへての 哥の御母
えいいにて

あくてゆくしむこゝのつのそく みとりの 孫しくゆ
らうしと
桜 とく 引の詞
冊かすこうつゝ 三位のつまりしおもへ行人
さらし事し
さうめわつりけはまりしき事 まかめん
哥 御くさのあはれ思いやりくいふて
かゝる心のありかへはいつかりかへ御やま一この御
桜 若り心思ひうちゝん にあり御やし
事し くまほしふかはしく 哥
詞 心得ゝ心しく
桜 くるかるを松のうちかくしく 一四まり
うつしのらいなくし御く

らうてあまりくしのかたらし
姫　中将の詞
尼　いつしきにまくらゆるはしてゝ
きしつゆうらくよしのおく人々の
姫　わかれのみまし　尼
そのたびにあはれんおもひまゐらせ
姫　さやうのまてられいつしいてへいまゐらし
こゝろゆきさうて　尼
ひんかりてをりしきこえてしも　こしも
尼　ようさきつのほしんかくれてしてい中将
ありつゝ
さしたおもくてつゝいつくし
姫　母の詞

中将の御心ゆへしにつゝとし
かはらくにても申すしありしかはりへの
うなさしまてらさ給ひし
姫　うなこつかひこゝろのつゝましいかゞ
こしいくものをさまへこそのことさえもよ
まかりし　尼
心ならひそこつかりとをすてへ御いさし申し
その身をしやるいしもかへすへつれて
姫　らうさつめとゝし中将の母くめいはろ
ともうといて
河　いこのさつかのももとせしみつめし
申しそのすれしゆえしもかせうそ
え中将の母ゆへしもう済みなうつまいし

きこまし
いかにも　信
うらこなたは母のつまとなりまゐらせし
いとしくかなはぬことゝも申し
中にもなくしきこなたはそれにかくつゝも
まれかくなりしときこなた
めしきこえていてのち
元母かなし
ちいさき家もちまいらせ
定頼まことに家こそ二てまつり有し甚の家臣の
三ふつてこそわたし
元甚の子承なるへし
このとりかはかりのうちのかたませてかねてまつし

しまうておりかきて申つくし母の
ものに
こゝろえへくして唯うこうしたりまいらせて
元しかうちの母のうくとしゝゝ候
しかしけれとも候すててさて候
とかくしてまいらせ
二ちかひにとり〳〵してせ
にこゝそのまゝもかくしてまいらせ候
うらつてうこつきいとまいらせて弁
かくてこゝろにしてかくまして
いわしきこのいてさぬかし中きる
との申にはのかしらのいかくまし
らと申すもいわくてまいらせて

くしき事をいかなれはとく
とつくいつてかんしゆ
うまうかのをくこてふ中まうまてまうく母ゟ
宗清ハ承くうて人も可くし
ちつてうら寄すそく
うさうかのさ作し
なそ小さ作しくおもしくれしき迄し付ゟ和く
く
母ゟゟおえうきうかゟく作おもしく
とし和とうてつてし和てて有句をよゐしめ
宗吉れしとし吉し
とゟ吉しれさん
翁とつてしこし母ハ和しとかましにおもくて

とつれく
くわしくくく
句をさゟちつてうかつたまく宗吉和く有
てあていかしてこなにくさ申くつゝきわさ
うつりしうこさうかおとしくつてく
くら和く申しいわしく必く
母母ゟ中申く御覧し翁
子宗清ゟわかちんのゝし
こひゟまへん
翁んゝのまて御ことあしさしのんゝ
みいつてくろくていすくらわく申わく
翁宗清ゟ家んり翁
む宗清の翁しよしてんいつてたしたくへ

ちりしきてつもりしまゝにふみわけていにし
ふるさとにくらしつゝもしきしまの道
家 夢かとそおもへはあはれしらましや
しらすゆめ
しらまし 母のことゝり あはれ 常世にもひかり
たつらし
ひさしくもまちしほかくれ
家 夢の中作なりけりいつ
さらしくも有ゆるしもなしいつ
家 つれのしもあきつく 以書之
二月まつそなる事なりけ
家 尋死ほもの いぬ
をしまれとなつくしくも

家 さゝ浪事し
しらつきはうて
母のかはせきくうつし
かりなく ちあらむひゐ
きよけしいなから
しらつまゆいまなひ
しらつるのもみちくらぬなつく
かみの手はいるまてとまし
さらしつゆく
河 左古詰 戸名
こひつゝしるらむなにはわかし
秘 かりやりつへし
たち所かりやりつ 二条の姫つしてある

しつかなりし

弁 おもひかけつゝくらはしふかくしきすゑ
くもゐなるゆくへのみそらにいてゝなくさむる
家 くもゐなるみちのたひにはかならす舟の
車にゆく車にとしもいてゝかね
とおもひしものを

みかくらのうちにありてかくもかへつ
くもゐなるをかもわきへとしてかねてや
くらもつし
みつかえの前にて一人をかくしおもひしにけるかな 非可下
かへりし事
極みの内前にて世かしかしかへりてける
いろし事にくらくしさなるもひこえてつゐの

らくよしらなるとかゝし

弁 二条院にしてかゆくの五夜さくなかく
かなか姿をとりて事し
ひとつくいかゝ哉ゆかし

家 かゆくとかゝかはかねかゆのりへなく
今ゆくいろのくもかな
家 うきよにはのみこゝろし
かゆくゆくゆくはかゆかし
いはくふかくきゆしかなかりて
家 くもゐにゆくしもゆくしいけくつゝゐる
くもりかきはしてかへしかかねて
ゆきよさくいゝろなからく
家 きよゆつゐとしゆかゆりかなし

主　ふうくの申しつくおつかし
次　かしこ申　罷くの事し
いしし申しけんしかく　くまうゆしもしくて
めうほ
太　かしこ申しけくかしこ申しよくしこまる
すること
太　なにとてく御しきゆしゆく
ゆこゑおしこくとかしかしくしく
こくゆへおし　かしこゆうかいしいら
ふかし
太　なにとてしおかおしゆししそてく
つもり　次
ぶすてつけるてるとゆうこもしかしく

太　かたるくそしときゆうはなし
ぶすうおしきくるとめくうすんし給へて
河　そのたんてまつるしこ　おほせ次第
てかしもとけるか
太　いかう同　　次　いかう
次　いかう同くくもそくしとつるくしへ
つゆもかきくうけゆつなとしいかし
んくそのやしはるし
次　くへつゆけぶすこしへう事かいへう
いてきうくゝしこれけゆ申事
太　ゆのしゆにてつる　次
主　おきくはくしくてのしまうし
いくいかくしくくふ

母 [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible] 小藤 [illegible]

河 [illegible] 小藤 [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible] 小藤 [illegible]
[illegible]

こゝろのゆへにきこえこそすれ
河 うらみし
仏 母をくしてさてもこゝろのつゆしけし 言河
きえやらし
いとゝしくなくねもしけきかなしさに
しらするおもひのなさけ人のつれなさ
いくよしもさくらかりそめ母のちゝあり
うつりゆく
あはれにも大師のゆくへたつねしそ
弘 恵ゆき
安 あはれしりつゝきえしまことの
ゆふつゆのひまにはなりて
こゝろよりこゝろへ
ゆ

ゆふつゆのこゝろにかけて
あはれしるをしへのつゆもきゆるかな 紫
紫 うくさこのあはれのはなもちるこゝろ
まつ事もこゝろにかくるおもひかな
さゆふこゝろにもかくるみのうきさ
心 つゆくさのおもひのまゝのさらにきりたつく
わするなよ
安 恵のふすゝ
つもりつゝかくしてもなをとゝめぬ
安 いとゝさきそへ
紫 ゆりつゝちりしはなのまくらに
つゆ人しらてひかりもなきの
あらはれてこゝろをつくす母のあり

かれ
こうきこ人もを御ゆくへもしらず
うれしき若菜を見給ひてせまる御かたは
この女はうちにさゑら給はゞ大御わざ
ありけるくらゐいへつゝ人にて
わかれまいらする人々はうきさめ給ひしかも人々も
柏木女御を御かたこそおほやけ人
しけ給ひし我も帰るに申し
女のそのおほしめし女御の富
わかの若菜のつまをしきりにたまひ
なかつかさのいかうなかる女
女房のかくしるさ事女の御
さらにこゝろへてうらみつゝ丹波
こひ給へるつゝあはれけり女御若葉上巻まさき
人かたのかたらひしか上巻
秋女御并影柏木
あはれなりけり
わかれてとまりて
しゆゝ女御給ひてうちつゝ
まかりてあつかひつゝ
こゝし
柏若菜しまてしりし
宮ことにつかさのしるし
こゝろをかよはしあはれ
またうれしきゆかりしけり
柏若菜して当代まつりあらたまりて人なき

こはく

千萬の女房の御かりもとをまつる事

常陸かりへ

萬　まきのめにて　うへまいらせ候へは　つるのから

得分も出ても今又五の人なしてつ

のりさめ　中すまし　おこしやすの御しもかて

萬の王しやう　申上候　とのせんか

すゑゆへ　いしつかへし

世のわかれのふか内々かうやうと

松　出雲　ないつて人のもとへ行　まいらせ御

めてた

わきあとへかへりけり　世界へ行かれつゝあまりあら

萬　無下のこゝろよりむかへまいらせ　常陸のまつて

うきさ舟より　ゆくへも行しらせ

おおかみ二の家の人々　まうしゆく　へうしらせ候

とし

まちほの家かくして　むかし申すよう　ゆへ

人々もしりて　ゆくえもへ　萬くいら

おもいのよしいつわりて

まいらせゆへ　あなたへつくし　すか

萬　萬のかりとてつのて　よく　からり

おもしろもしあへす　なる　にしいの女二人

ともよろこひて　まいらせ

まちの中よりまつりて

松　こなたへ参れ

萬　まことにこのわかうこそ　こなたの御家の

袮く
しれしるくゆくし　ちりあり
なれみつれぬ事
ことのくはくあるへ內
此中よりのおもき事ゆへにいつくし
あるへくこととしくへきし人の
白しるくもつすく
とく見えてれいやしいとあるへくけいをおもへく
河　屋戸　宿如此但想不得其心猶可
て見
花　河海云屋戸宿也但不得其心猶可て
見えし
今案右のかゝるへしとてもいふことの世にこそ

中にも云つしとこそこれまとことうくしの
於くまへつきし世かくのまへる世にかくへ姿
つまゝ御おもくひてくつくらしもなくし
手涙しきも本を云給しおもひ助つしてす自人
のり世にしてきてひこそ中すりくこくし世見え違
ここらせまりつまとめし
お中に屋戸しこそ涙をしくこし助用とくて見
よハ中しこころしつくるくへく
世見えたのせに世にへし見えくるのお平下し
そにゆきつけしとまても世にわすれて記こく
手おもしく　女
秋世よふ高きつく
其云りしよ文字かやうとしたれこそてし継後也

[illegible]
[illegible]
[illegible]
秘 [illegible]
[illegible]
孟 [illegible]
[illegible]
孟 [illegible]
[illegible]
孟 [illegible]
河 [illegible]
[illegible]

河 [illegible] 世中 [illegible]
[illegible]
秘 [illegible]
弄 [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible] 世中 [illegible]
河 [illegible]
[illegible]
[illegible] 世中 [illegible]
秘 [illegible]
[illegible]
[illegible]
孟

千

秋ところくしきよのかなしきこゝろ
しかのいろくさならいて世の中に
世の中にこゝろ西にくらしき世もありぬ
いとゞしくさかりもあまたくるしき世にありしかなし
すみかハとまり事くもしろくしらいくつ
こゝろつかをもしめてし長つゞきかなしく
中くとめあはれといふ

まかくしき事のかひゆへくゝく
秋 さへいかなるの御ゆへ もろこしのかたに
みちのいてつらきゐをもつて目もくれけ
かれくゆかりのあふあはとかうらみ
すくしとも恍吟すくしゝ 参

千 世のなかりつゝつかなるのかなしよりかな
ありくしるへくいこんまうつらたまゝ
かしつくよの思ひもつらき
まつしかし事にかく新そくつらくく 也りとこそ
もすり
参 ありとかくしまこ薫のぬこゝりすゑく祐定
しらすらそく
秋 ゆゑんこそてもて人ありてかなし
こうつくかけけしくさきく御つかり
よその宿りうくまするつかひつくし
こゝろしもんそんことこゝいくまくらし
参 もんてつかこほらくてん形のりの
寝覚のあはれ人もんすへかなあそくしらう

色しごきつゝ有しこそ
けしいさ申さうてけいしけそ云わし
余 いやゝかしめさましけそ云れし
申けり
さうつてゝ出かし
こゝそのかつをしたんすかゝつゝはて
亭しか申けり
葉 新たんすゝはつてをと うき玉く
けしのことしはいかはうきはなく
茗 のあすし
まてゆりしやうしらこいそうくしはさく
余 五文は川の内す由かなる物へ
加ましてけりてしたつてしもふはらし

ましくそ
さりかへりかゝしく
余 様きうしつゝのすゝてましゝかし
わつ候ハすゝのおしくしさ
うかりかてのかしわかの具をかそ何へ
山こしかくこう〳〵しやう
さしてちんそへの具かしてみすぬか一へ
いさしく申すゝや
千八こそのかハそしとしても申うそやら
としてさかし申うやしてこ申こはなか
らしうて山里かくて有かてし
ゆ こゝそへつゝうらゝ見てかし 申しも
世くしてまかくてきさうも

中ころハ作者もおもくかゝれもしく
宗　とくかく懐旧の心を続られしころ
またたちかへる吉野の山かし
世しられつゝ侍りけれはすこし人の作ゆゑよそにしてぞ
秘　ここちやかし
井手の六田　法文に　荒しく　うちて玉の新枝
くり返し人かしいつかり作のかたる文すゝめ
事とし
いとおかしし
弁花　業のつきの作ものなし
それのうへにさいはひしつまりたまりしけは
宗　業のたちまちしくさしての句なし　上句
事なし

秘　業の句ハいとさらへの後作らくとて立
一句の心（くたのイ）に文作りぬ
いふ事作りくく言かしく
さりかし
宗　とりく舟のかりく月くつかし　さくさる
あやきかこいさつ
ここてつてつのつい思ひはか
そこに作りかつてしるハ
宗　六句の事にくてく候つのおちより
とうとうしても
くくのくおもつてく　すゝろこより
秘　業の句く
かつしきつかへく

河　非回

さしてのみおもへはしらしにこそいふましきこと

秘　慈氏の御人

しらぬことのおもふ三条の宮ゆく

みつゆきてかしこにおはしましてみちまうて

弁の君のかよひてやまみちもとにかき

かけてまたかへつくに侍りつることに

秘　弁の君

こゝにてもとのいさゝかこゝろの

裏　中宮の一条院

かしこことも　いかし

秘　慈氏の御

あらこのひとつきくに此ほとにしてかくはおはすらん

あたご

河　愛宕聖者空也上人事見彼山縁起曰空也上

人詣請小寺参詣領曰念仏行何所

まるおはりつるゆくすゑいかにと思ふ

たえなき月輪寺は月輪院落山同浄土

也魔界断縁聖衆影向之所也彼所

世をそむかれしかたへまゐりて

ありとある思ひもかきつくしてかの

ことのはのあはれなる　女かたにもあ

取意略抄

　柿本の紀僧正といふ所　あはれにてたのむの

をのへにてもいかにあはれなりし[illegible]十二月

その菩提心をおこしつゝ内侍奉十禅
師ゟ補やらるゝの事はいつはりなり
秘 阿弥陀を奉上人のまゐりしか殊に
梅ト紀伊の事かひすいつかりゝと有し
ゆくを祈せは百度のゝりゝうらみの
人もいつる事あるへし
千見阿弥陀文殊事すなれはしらさこうそ
うらむ事し祈せはかならいつまかすりなし
しかるへし
並 阿弥陀 釈迦 いつれもよしと 文殊 秘字
行てよしとし
人ゝく丁寧し給へはかならす
秘 字の詞し

衆生無辺誓願度　四弘誓願之随一也
或本 四弘誓願
衆生無辺誓願度　煩悩無辺誓願断
法門無尽誓願学　無上菩提誓願證

哥 人ことにおもふこゝろのかよひなはまよはしつゝも
わか身の様にかくてあらん 釈十三
並 六千阿弥陀なるへし
私 人ことに八千詞のちかひとて事し
かなしみたれにかくしいふにも 文殊菩薩
皆人々の詞をかなへんとて
そのつくりたるゝの事なりとこれあらは
こゝとしるへし

かほよき[illegible]いかなる[illegible]

[illegible]

[illegible]

ゆかしき[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ちくさ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

燈熟（ココロニラミ） 諺語抄

[illegible]

伊賀部女（部とも） 中妹ナル狐ニ[illegible] 又云伊賀ア女 三云女[illegible]

アハ女 狐也 斎宮寮部女 是狐一説伊賀伊勢国

白狐とたうめの前とも

新猿楽記云野干坂伊賀専之余専女 今俗呼女為云々

諺語抄

の青表紙の本なし
土佐日記かきたるなるへしとみゆるを
すりはらのさたかにいへる人のうちにもき
あるらかのかはりてとて百しはなれはなる
思ひけるにたかありこのころにしてまつる
しるすくしはこしのはさらにいてたにて
つかさしたるのこしのはさらにいてにほを
又ここにあるくしき物とてかしあるはさもあ
らく人のいふことにて事と
合楽にしかしらてからして中よりすみのうへ
并詞書いつれしきりのかはりてゐて
称のらんかへしもとのにして中ならぬし
くちをのかかり書しくてる何いてのこと

つきりに物し云し　又平中初の書物り
ことあるの物し尸ハ称して云し
物伊勢たかくし二月くにてとき云もの
と称のくとうへし云し
詞物かうくてとら義のうちの中よりよ返云
あり様のての紙にしかしを称のらへかにらく
すまのりし
業平業平かへし雅平家給ましつしていて
ものしき時の書りいてのこ白さゆらの歌
てり并この給人のうひ思ふへし
云こし八たる中よりしらへきり
物草の詞し
人のものゆるひまくしゆる

ぬし 菩薩の仏の前に捧く無量寿経讀
仏くらゐにつきまして御仏しさへ仏う
おもしろうありかたし無らくへ人のむかしに書経
ありかたいつて 出
しかれともいふ　ゆるへ
ぬし 申さん
こゝにありかれくへそこ給て御へ
こゝに申す菩薩の宝に給え
女二いふて菩薩の玉冠 出
しかれともかゝらしめつきして
ぬし しかるにかなりにかくれなし いさて
あかくしありて あさましさなし
くれへし二御う

出 菩薩からうて申やうみとさゆく
女二おもの申さう百くらうくおはしませし
菩薩の御るしう慈悲あるにもまつて御の
まくなうさ申されう一し
くらうりまく人々申あきく人々にもこふて
さゝく走らて
たゝうちくて内裏へ菩薩てこなしの年
おもしろさうさ御母のありよしさらぬ
母 へうてみて女三く 出
私 内裏へ出し人のこえひろくへ櫛
申すり 女二こおりまあらんにあれもしく
菩薩の母 女三こみて仏に作らるとも
らうう

そしつくさまへ、こゑかけつゝとゝく
ね　女二宮御方へよろづまうしきこえさせ
つきよしかはいまうしきこえつらく
しらるいつり　ケ
まことしのみえしらしてよも
弁　こゝろの東のくるまてさうらく　宣
うさへしまさつかはく
ね　おくらくとかりて　おさまりしるとをそし
くらりうらしつらいはく百へ　去年月と
みとかくのとらし
牛飼　應神天皇乃御すゝ御方
非にしもたしかまうしやけ
さりあまのしかみのちかひ　あくるいつかは

前かうし
ね　内府や　弁　ね　つかはゆく　御すゝく
弁　女御国をとらしし
宣　うれのあつらし　よろこ　荒の　内府の
ときいひてもついてに　つかはらし
あはからいつみ
ね　いつかたの年つきか　三条せうし
うち東しさふいてもとなへ
にすゝの年のつらへ
くるもそこのありとく
三条のかたとものさとへ
ちゝのかたらしく
年月のゆしきく　かいくし

こゝろをつくりおもしわかゝ人
玄　雨すゝ有　うらましきかたの中
中よりも詞葉のかたさ　うるしこらの
寺わり
かゝらしはのすゑり　信昭の人
かすみさ　こえかなかうらのゆかゝれかへと
玄　年尼　御たゝこゆのゆかゝれへと　ちゝ
かつらむつましきと
あらく人しそひをみすみしかまれくる
桜　年の詞と
ふかつら中りこ行
桜　かゝやつて
見てかゝらつしてつしころとそ

玄　信のつのしか葉の句かゆく
之　ちよしくかくしてせつてし
しひらことちらつらわらく人きちわ
しく
桜　うらくらしいとそこきて
さしやおもんて
年　葉ハつ中ふ見ひしてて　玄　年のふこ
ちつさみさうのおわわらのかゝつく
葉はつみ花のおもつれかえ給ふきせしく
年ゆりおもんてつさまつて
こちかかちうらいてしら
桜　年し　玄
雨出ゝしつちちさきかゝり

前　さまて夢のかよひしまくさ枕し
すゝめけしこゝろく
付　葉わりし錦も夕てらし
ましらひあかつきとかまたし
前　うらのくてあるて
なかとき木にて月中のこひあはする書し
付　月しらの心ありしゆもいとくまたも
前　下のさ白の中ましとも
花さくらしゆくは足ひく
付　花とくらくらて
あとのりしあらへて
前　かわりのもと二てし浦の中長なりし
付　母ゆるるよしとも　千金

しわくしく見てしてさくあるし
前　年のことく　千金
ゆつてまかりとも見あまてし
葉のうくさまのなの弁りもいさてしするし
夜りうもしし
河　秦始皇本紀注曰西京賦曰徼道外周千廬内
傳傍曰土侍宮外向為廬舍晝則巡行非常夜行
則警備不虞也
前　しのこゝろのすゝめの名こと　河巖
河　家のあかれ中しよりし中御前　郭称
しくいて源順夜りうら久歌よへてし
下　きこえりこゝかしいし舟をて千しまの
さえくりのしるて作るしあり

保は中くらへ門にくまりてえいしくまうしらつの
やしかすくらつゆにしのならとかくらつしもら
右人しなつきよつのかしき
松 中にて静し ふ升 静のかゆく
私 俗世往年見三世卷次外語く云右摂ノ静の
きかりて左りそてすしに六は各をよりて斎に
中の生ありてしい下りが刀刻りそうしてこ
ひとき
ころの中車にしてくらへ門に入て
ツ 門白へ入つて行く門へ入よそのあへ下さく
その口からり静て似らかした
河 南かし二も下て中の二楽も待さて
まくかり静もあをのかり

松 引合門 ま 引合 ツ
まうかくし 川合 五文字 秘蜜問 も合まうかくしやつて
まじとんやし
さしてうすおの
ひ 黒しておて黒ありーニうよく言しまこやう
ひとうんいりいてすすの
升 こうしけなるをいてあおくすおうのめし
そりあをもいかゆきく
田しうし唯黒しへうしいゆんかうあ一し
上藤しうあく
松 誠しあいしまし心うしくうしあるか
すのこ分一し 光
さしうし蒔や三升れ来やのあるへきやうあるそくさし

ゐるしくまゝ給なりてとりしつらてあらまほしき
かしこく
ことわりのことにしつらへて催馬楽のあつまや
すゝしくまそゝきのまゝこのかなたそゝく
つらしくうたひ中にあはれなれ
第一寺よりあくらしつかひいつ
阿　四阿（アツマヤ）今新撰楽記　阿屋　為順和名　四屋　上同
東屋　催馬楽
唐令曰宮殿皆四阿辨色立成云四阿阿都末夜（アツマヤ）両下末夜（マヤ）末夜
同令曰庶人門舎不得過一門両下　辨色立成云両下麻夜末加
ちかひかうつりてかくこそとしつる
第一きこえさせ給ふ
ひとつにみえて人

くらくなりぬるにしのひやかにましくらこそまくら
このうちかへしうたひかへしうかへして
かすしきつねならひて宮すら
まいらしくいふを
こゝろとけていふへく
おしはかりけるおかしうて人すめしくらの
しらせ給へるをうつくしう思ひ給へからん
くもりつれし
うしはしてうへし
ふかりし物の気のかはりにかたう
へうしなへらくことにさはくかたわら
拂く
ひさしくみて久しくさ給ふれ

河　こゝろかけん思ふおもひひとつにつゝみすて
縄のくさむすふり
むかし花さへあさくみてや道の人をたのむへし　九人
哉　母女なし
女　母なにかとていひける
そのひとつの孫ひとたひとたに
文　なにしのてしあれともかさねて申し
きしれらしかくあつ大とも人の作る
ならひさきかいつゝ事あれとうれねつくる
かゝるなるを書ける　物くイ
女　つらしけり狗物くらしてもてきとへの
作しくつ詞しこゝろすくへとの事ともき
内けりとも

私　文人とるの手にてそいふ女に丹下文
りくしなときらいかつてきとくて
ゆめくらうちらいあしよう
とろそかつてり文にりとく菓の体をね
思はしけの書し
あるのことしうらいて
すきとなるのか菓のとて
おけりまてかふ
大殿かりしめて小屋イ人のてすかれ
おかさゝれくてまえし
河　溺くく
むかしひさいしてかりんとあつく
なのしめくそむしきて

葉 柄はくなり
ゆへしきくるまのなかにもよはさなかし
ト かゝの中にあるハ葉しつかにてうへくさ
かくり
ト 葉の人るゝかなのすかくみちゐ也と云
し車まりしかーし
ねこゝろのこゝろはかくみえてまゝまの
有し心し
あるよしさのまことかうつしうまれなくら
し
河 車都書徳詩、轉蓬送車輪とあり
蓮葉の車輪のやうにきさし紛々く
らう御へも道とかしくいつ葉くらへもたの

くらゐなとまうてゝこゝろのまゝのわかき
卅の秘説
あり
武む素詠あり新田作らくの庁れての根の
名一條て
む説抄の注にこれ葉の車にかゝり
いてちくし車の中にいりてかくしいふつき
かりやとられし黒大納言そて東宮のいりしく
車しりおかくの女房とかくしひとかくしく車
とはさうくに入かなくしゆるてうきとし車
あくるのまるにあるくにいまて侍従出そうて
いれ葉し侍より上の御めりふむのすかいへ
いそつまくのまく庭のくさくいなむとくへ
おすめかあしなくちへしい葉てあおもし葉てなの

中ものゝよく〳〵しなとあらん荒てあるまし一石
しらぬ萱のみなしらぬ人なとまなはし
作らすしきまる
秋ニ清音催しきよの中にも猶てかはるなる
月へし
少将萱は寮行ゆくてよは有出萱の
中にも猶てるゝ更細月へし
萱とは鳥のなくしまし萱はなのまうてく
よのく八てかれすれく
秋夜月きし人行ゆく明くて中宮也
少夜月てし人行はあるめてく中ときにしけ
ものも一しなくらる内へつすく云ゝなる
へらしむ

しく〳〵〳〵くなかくまし〳〵
萱うくこそなむなゝ御月のひとつし
九月つくまつしあくもなるなむ
秋 擣衣ゝゝ忘のゆへし
萱 云上九月の忘下 云 こなはつきつく
あらく
う月てあなくてれせかねくもしかく
河 歌合 九月の節し清のことく 云く
もつるゝ十二日あらゝゝの
萱 宴も十三日の夜くれて下の所せん有へし
云く
なかくへきらくしの人事しあるり
少 中宮 ゆくて清くし 弁 のなもの候まてれ

きつく内いそ書かいそしをひさるつくさと
まつこ也ふき合ぬ人もし
柏　中宮のしはまつ出仰ちうし
そはつそのらすしつくりちさけむてん
中宮の弁のと高かこうちさ仰せつかく
かきらはてのはつおかおやはけ行つさし
あしこもち人おくをくて
宗　方作の東向にかくてやつと
人さしやさくきこし
詠しとも一人こくつゆりらしにきしたつけ
兼の人こうもやく
こつくしにたしひちか仰ちつしつゆ
長　手兄ともし　宗

かつて付百見ゆくはかしつくは
うきさうのかつしみ尼君のもとへつかはさる
そうく松ハ可おいさ
宗　東庵の中をしつ方法くかいさとうし
うれしわ引よつき
長　定法しこ牛かゆらつく書きて
作りそこうしのまくら　河　法性寺
柏　法性寺ハ貞信公建立し給へり　尊意座
主ハ貞信公の師檀なり　作法をきの
ちらおこうしく作法をしきといへら
うつれおもしにいさ行のりとくらすう
長　こうおはらし　かへく　柏　作はてし
そとのいさ作くさへあつしし　宗　うらくつくし

一答男女同車の時
式部之御子の仰お
みすをあげかけてゝ
うしくく車の
くらまへ木丁のうしろ
まちうしてし
てゝおりそのうちて
く一ミうへ上ゐ

ゑくしきこえて　ゆゝしき　めしかく
ゐ　車のうちにあらせてこそ　かしきまゐらして
しめて給ひつりてかしこ給へる中より　ひきいつ
こりく
ゐ　車中より　川めして御覧　同車する
車よそ
ゐ　男　女わきてのかたこそあし　中にての御さし
つゝけて　木丁のくしもの中にわけるもの
すゑて　これてこそ　おそれ　車よく　御ゆるし
川つゝきてあらし
ぬ　もしく　男女同車のよき　くすゝしくゆるし舟
く哀しく　同車わきて　車の中より　釣殿へゆき　世
同し
ゐ　同字今ここ少

尼くらく　いてさしくわく　かの御かけり
ゐ　車の中へ　めうしの　さし　てうつりて　きる
こわく
こひうそく　のうとすり　こそ
弁尼のきくのおそ　うすかとひ　いてひく
のわく
御のそく　いとまて　ゆの　こしめり　こうちとしく
うつさひ　へるゐそつり
ゐ　御のそく　弁かゝるかの車の　ましかる　いかく
しも　こうて　弁の尼　すくつゝくゝの　ちゝる
さそうすり　うゝひうしうるわ　いちく　いゆしく
ゐうて
弁　女くさとゆく　ゆう　つしの　さし　めさそう

宰相のしるし
かくてこそありあかなかのめ ともかくもかかり思へし
ますか
宰 侍従なくしぬ秦しくなかり まてさせなとて
かくてこそかくつとおもひて大殿しつかふしめ
わすてもいひ給すをとハこしつめく
中 弁なんともけるを 宰相にかはりとめて花の
かしこのにてそのりよしして
宰相もこなたに仕うまつりせ
秘 蔵しこまへにてきこえて 中
さしかくこゆへし
中 あるをきこえの
かく大臣に宣ひしかくもなくへしまたね

宰 宮仕の事なくゆゆしきまかり 大臣のす
すゑしいてんとくのつつめて
うへなりおかしきに御ともかなり
かく御りへてをなかく ゆふそのうへなりく 宰
くらふへさらかくなか
ゆるの今をなか弁 かくありなかなかのよとさすの枕
るくしくとつくてなか
中 吉のおいかのなかつつく 経（表え）のいろり
つしいてかと
みな冊なりて こまりて給へつてて 九月して収
かなかいし 楚王の塩のへのりとて
此なかおかはしさ方つい 此かさかるの宰にて
恙 前に給わしく たかさら

たゝしうけたまはりて
いかゝしきすゑいへこし
或云自高至低車乃輪乃落来て
むかし内典にいはく下よりひかうて
りやうしゆすへきしらぬかたりあやうく
まかせしいかなくきのひきよりもとしくる
あやうき下より下より上へのほする
ふとかたちてそよしく車のよみかへる
神の車くらかりてさるとうよ葛の名を付
きるも一とくしるし
よくかしこきにつかてもあなの下よりかへりめくる神に
む故作とかしのよろしとひうなつて
は大事のよしとて候

くるまのわかちことしくつもてゆつる
は今さらにおこかましうこそ侍らし
又世のこと車いとすくきまいのよしなかす
しくいて
いときはたしなりて
たとへの葉て大かたよりちからあなつらし侍
人ゆく
きうたこ人あまりに見もてしもさまゆれ
作たく
これすしとこてさかしく
舟のうかすしかきうつりて葉でゆかれ
しきつのゝいとしましてみしそらか
しおきゆうて

あまくたりしてかへるかな
蓬　のこるうらみもしきりにそなへて
仲安　なかなるさとのしもふかき夜
いつもかくのみくらき月影
かゝるさとはりさしかゝりて
扇　しはしもとまらぬ身を　季吟
いとゝくる男山ちかき
似　大路よりふみしくれし
かはらぬこゝろさしを
あはれなる大井川辺にとゝまらぬ
いかにもこゝろよせの
大かたのかくれ
大井川木の間の月そのこる　季元

蓬　木の葉ちる嵐も又大井川
よしもなき山にこもりて
おもひ出ぬ草のかれ葉を
似　わか身しらぬ山のゆくへ
なれきぬる身のうき
似　ともしひの中にしのひて
秋　月のあはれ　季吟
あはれなる玉の中には
河　こゝろ　こゝろにかなはぬ
きのふけふ
似　ちかき日をへて
さてもすゝしき
似　下葉もしくるゝ中

きのふ三つしてしてありけるとく　千歳
礼　秋千歳おもしろ一同に一二たびしく
大納言のつき大きさのかたちあらしこ一つよく
くくくつきつくんてつしてこころの口つりてつく
くらくさくしてしつくんてわかれ山の[illegible]
女うくらく[illegible]あとし大こと御車
うさつるわかくこしてさりのさうりつかしくつく
車くらく松にとしわり
ある三さてらしをつりつかくてらくつりてすく
松　尼三にて松わし雨つくとしすすて廊
ふりくくすかわくさにかくくれつくくる
松　礼くくにかくしてしも尼すくいくしゃく
ニしうし

よくしをつつきすみのししのかよくいこ[illegible]
わすしけれ
ケ　尼出かこしをかりとしくらすよくは
しみかとしするかお女房て物にかかこみけく
とくつさ雨とし[illegible]わしのことてつきみのせく
り　弁のかんけひちゃうつゆいとて
松　菫のんてこ言さてかく不便とよろこし
しくるかけあかしわり[illegible]にかくこ[illegible]
つるさ雨しをつあくして
女　のらくいて尼さのようつせしく
弁　さのしくてすつれて
みつさて言節かくつくして
むしらわわくくいくさみのつ節細とし

らぬにはおもひて

中　女御の小宰相のかたにいりておはしまして

秋　きみをみてもおもふ一し

ひのもとさうらはこそしられはし

かたりおはしましつゝ　まてもまゐらせ給ひて

二てうの小宰相

かはりけし

うらみおほしめしはへり

中　かくてつゝのをとこ　少

紀　ち京のかたにしはしまつてまつ

五のくにきこえ宰相　女二宮をはしまして

はしめのよしなにしれはの事なとかり

道にあはすまて事なりかけてつらはしかけてはなは

あり

くらまちのほとになれはおほして

いまれ舟の下りしかはしけれは秋くいはしかはし

くるまて葉つく

ましくおもひてみなきこえさせ給ふ

少　浮舟よりまゐりのほかしさなくしおほしまし

なるもさしけれとかはのこのかたのおもひ

ひとのもとにまゐれるかたかなしきの

秋　大将もさ　女

かのをこのおもひしをわかれ

宰　くさのかたの紫のゆかりさてさはかり

おほしきかは

このをりしかは　いふてくわくくさはかり

え　女二宮あり　まゐらせつゝゆかりて

私　女二人ありて　哥

といひてをかへりけりとあひて

くものゝ手なく業の名すくゆし

ありかりしくすつへし

私　女二人の手をかはし

いかし共りつかりつ、

業平はむかし女をおもひ　母　女二人あり

さくしつかつし前生育しと　もあれ

と物かたり女をつかはし　いつしと

こゝろをまよひはてたひかへして

私　業平のうちたし　ひきうちとけて

ましいつてもかるく

男のけしきみえにけることなくとし

ゆきてしかと

ゆきしかまへる

私　業作ついてとさしおくをわいゆるする

しかはすと

むかしはさんなふしつれしもおもへしうす

むかしもなかりしにゆみへ

とまつかりしゆみへ　風流すくゆかしきは

ちかりしとへると

とちなう二のまつ人なりゆし

母かさへしさうへ太平人取成りけり

うとなりしと

二つりは　何　不審　不用

さりあけりきんくくりつ

一　琴(きん)　箏(サウノコト)　ことくらへうたもうねか

これ事ハまことにえきこし

ことにうちねの事としもに

をこそまなひてかなり　かならいの中にゆめしも

八雲琵しこれしく

紗のみろし

月もしいつの

十三白の月し

こよひさくらの花しつくしくへハおもしく

八雲こしの上手きつらむくしまい

おもしくそれの人をなるか一し

世し称のかつるし世ありしはりてひいて

さしへらゆりつし

ねことのあの事　琴のこうのもし　八雲て

大ひしきゆ十けんほうの

しかつくてりいるきりししゆ

琴の多くなし　八雲の花さつくしほう

そとしと

むしさる取りいうしころつさほしてとく

うくしのもの　うきろてあしそく方しこうな

琴のしゆつさす

いくつしへて

うちつるか　八雲のつと御く　十白へそうし

四え人ゆうくえ　うきうれへ

きつくとあつてはしか方さつく

末 うきてあるのまゝにまゝにくゆく
人のみなはたゝしくしく
本 一ほしもなかくはしなく
ひろくてゝあはしける
ゆつのこはまつてる柳
いしてしらしひてまつ
あつしてかはらしいつくしうつくしき
うてかなし
やまもとつくれしよ
ひかしもあの宮かせなかな中と葉の
こなふすいしはのみしてまし
本
和はんかなしかしつくして
あへるなしてしはかなつゝとも

ちひろしてをさめつつかし
あしはまつしつかしさつくし
うたひけん
子
あつるかけゆをかつか
吉妻（吉事）
かへくはくひとくして
和ゆしあかくもくしもとゆへかてな
河
あはれはつるあかまかのあなかまめ
ひかすさしはくしかかかしてうつしか
うとしひてましあかもてさうかれ
さしわとひらくきませやまつま

催馬楽東屋ノ律

そのあまそゝき いりしつかいくつゝかく
末 かすかひしくしく和をかすくそくしへつき

かくれなしとこそ候　須ひとへにかはりて　今の人の
こゝろにてもいかにそ
平大和のかみにまいりて一首に　かつまつて
後冷泉院にかくれて　ととかくあひて　なりけり
やまとの御
和泉式部のこゝろにもし　ともにつゝしたまふ和泉にて
ゆくへの
並しとつゝみ　こちらの定　このまへのうち
まいりて後にこゝろもいへりしくとたまふ
なりし
こゝろにてとくも思へきれてこゝろん事御
秋　並なく
とこそなりの御秋御めかりしか並の思すし

らくしよくん事の記中納言すきぬ記す
さんかはりかへしてに其の徳也
楚王のことならんかくつゝみんとてかへしても
詞　班女閨中秋扇色　楚王臺上夜琴声　順
有秘説
手　詩句七　秘引同詩
秘　こゝろは禁中の　こゝに順かくかくそうち
並りに楚王のうたかひてかにかなしと
其事アリ流布の秘かさるにかたへ
子のかしとのよしく
秋あつきありて
並　言浄のありて
手　書浄になくしくかなしとなりにそれ

まことにわらく御のんしようしやうあるへからす
わらくわうしとうて
さるほとに一きのひらんとうかき能々あつ
しつかたもんなく
上のおもてよりちかくわつくちのまへへ
ありしうちかくしまことかり娘かのおもて
ときのりちかくとこう事は御むへしくちかくる
く枝さきの袋にかたとみとふとめかてゝゆきとも
手燭女か古わして御つかまつり
松もりかきくしくちかくとくちかくらあり
婦く
公女御のんわしさうか御むすしてまてまて
らかみんとかきてくもくに御く

ひとしもてわかあまこはとしへきも
私御身けきく不義にやうらひちよ
つゝま事しれらゝさらんにあるかく不存御
しうかし萬つてもしはくやうしもみれ
申しさい茶表ともと公方様御
松墓の母をよくしはらてく御はんし
うさ舟茶表さらくはしさい事あるは
もの一はして
ちかきうちにうつりころきゝて
ひとしかくちかくり武士のんかりとりの
ちかくかとむまき業の
すとうかかくし
ひとしかいくきらしてはてかゝ

さきたてゝかなる
中将はいかなるにか此人にしもおほくすゝめ給へ
河 いにしへのありさま 中将 あしらひ いさするに
本のまゝのこと也 中将 いひて しける
細 大君をまつはかなくしなしたまひて中の君にうつしたる
さもありつへしとのたまへるにやとて心を見たる心也
住 人をうらみて大君の事をいひつゝけたる
やうしかくてもいふ
私 西のかた代 秋の女房 へ つけ
さうしくもおもひあへす
大君の御かたちかけたてまつりて あなかち
つかはさるゝ事のさま いて見えしに
さうしきなる事し

五葉
さとのかたしくおほくれたる人の思ひうつりけるかなとや
弄 一説 きさいのみやにはへるときこゆる人の
細 うちの御かたのこともおほしよるへく
花 人の御かたちいとなつかしうて
弄 さるはうつくしう おもひかけたるにて
うつ まし心ちして御かたちの人のつまかな
しけ
花 のおほしめして御つかはせ給て見たまへ
いひつゝけおほしめす
細 さきたてゝ御のありさまをみかなく

国立公文書館
National Archives of Japan